ホ 2
4304
4

ホ2
4304
巻 4

橘乃嬬手下

○川

つ　詩の下にれくつゝ時つ風天つの玉ゐゝ。方九ぢきつちみ　玉をとちむる詩ゝ仕ち乃ち神ゝひつ
ゝをゝふとうり乃くふねこきかり乃て　つ　乃ゐ乃ゝ。方四大仕の乃ちつとハいと一
あかゆさ一てをる月　つく　上と同一乃つ〳〵ゆきつ〳〵ゝ。方一巨勢山のつちゝはなきつら
おくよたくゝあへをゝ　つらに乃て行乃ちこゝを乃ち社を。同九山代のく世のきき坂社ゝ
をゝちハゝりけを　つる　法をくちゐ。詩し。方一山のきのゝ山をゝ乃ちり
枕ハちりけを　神風のいせのをゝあらあひゝつるかも。れわけ一　つゝりをれば　傳去
。方九ぢゝ心のかゝるハやきゝ紀の咒ゝよいつゝりをれハ　ちり
かゝるハやきゝ。和　錄　鉄錄く紀記ゐ笑ま社ゐ　つゝ乃函　松の同ゝ。方　ちつ井ゆくをゝ
きて行るゝや。和文の比ハ庶の角を解て生かるゝゐの角のゝ寄ゝりをれハをゝ一のあひ
たゝふゝをかりてゝ。方二大たゝを彼方社ゝゝるかを乃つれあひゝゐわをれて行。ゝや
つゝふ　茅ゝかつハくの更詩ゝ。方七ゝをゝりをつゝとをきに　つく　御ゝゐゐつ一つ
。四　やきゝちのゝつゝ一百ハ。方十四　うたゝも。方十四

故
先光清風氏
大正十三年十月
三十日
先光華氏
寄贈

いきつくいなをゆねてやらそぬ。同八わるいきつ〜あひ
わうれるハ。吉　森　こゑ〜りのかつさいなつきゑるこゆふこ

つうみかゝまて　爬蟲〜。字爬手攫日爪持〜撲

取く。方四らつこの老うつうこかきる

。同十六こひのやつこのつかゝかゝとて

つき　徒〜。つゝひ〜ひ〜ひつきの延ゑ〜。方五かゝりつき

いひつゝひ甚。同十九きゝつうん

つうなく

時就〜。方西にひ〜山ぬゝハつゝ〜。同かゝきねゝ

きのつゝのにわれさへよ男よつきゑ〜たゝねと。とひて

つうのね　束〜。方六ゑゑのかゝとかゝろ

つゝ〜〜りゝゝりつゝね　ゑるかみをゝ〜〜てこゝよ

あけてもすきゝん

つりさ　山のつゝさ。同十七山たゝこえて世つゝに

つき　拙〜。古上まきし

よゝりほゝ　ゑゝ〜。方三ゑゝゑゝのつき。同十たゝまゝの

ひるつきかゝ〜

つき　洲〜。名貴〜。方一山つきのすゝ〜ゑゝきと

。同六ゑゝきたゝち。同サゝゝつきのゝねハ

つき　盡〜。方二ゑゝゑゝのつゝ

いるゝゝ日のつゝるまて。同

六十山のつきくのゝとう。同十わゝひゝ〜ゑハつきけむゝゝ杉のなゝぬゝのゝとひハ

つゝ〜〜

つれるかゝ〜ゝ。同杉ゝきにこひつゝさ〜〜。同ゑゝをつくゝ〜。方五なゝゝを

茗荷在〜又徳作〜りのゝゝ。方六ゝりぬゝゝりあけまゝ

わきかゝへさ男ハたのゝ〜杉のやゝゝゝもつゝ〜〜ゝ

つき　令をつくゝ〜。方五なゝゝを

とゝいのちつきゝん。同十七彩

乃令もつき

ほゝゝ〜れ

つく　。日二杭つくゝつまやのゝゝ。杭茗〜

。日　祇代　伊つきかもつゝ生ゑゝ斎〜匹

つく　。方八杭つゝ屋茗ゝゝ〜ゝ杉ゝ義の

杉ゝなゝりゝゝ〜。おゝくゝゑゝゝ〜。同し

こゝ

つく　。方十九かゝこひハ老つゝ杉ゝ〜〜あゝむゝゝも

。源　わゝけゝゑゝはしわいけのつゝをゝ〜ゝ

つく　。方四いつゝりもかつきてゝりも

ゑゝつゝ〜〜ゝまゝとゝきゝゝ

わゝゝとひゝゝや

つく　。方一衣まつゝゝん月ゝつゝゝ

。仰ゝりつゝきゝゝ

つく　。方二ゝゝゝゝゝゝ杉ゝゝ

。月七まゝゝゝゝゝ面つきて

つく　ゝふ。雲魂のつゝゝ〜

徒〜。方八たゝゝゝの杉つゝゝひのあゝと

きいかゝ脈ゝ〜〜ゝゝんゝゝゝ

つく　。方十ほゝゝゝこゝゝゝての舟のかゝゝつゝゝえれ

ゝゝそゝゝゝちぬゝをゝゝゝみゝも。見安ゝ

つゝ〜ゝゝゝゝゝゝ

つくゝゝ　徒〜。日皇祖やまゝのわゝのゝゝをゝゝ〜ゝむゝゝあゝひたゝゝり

ゝゝゝゝゝゝゝ

つくゝゝ　ゝゝゝゝふも。後後紀　字志徒〜。方十六ゝきゝてゝ〜〜ゝゝひ

つくる　作〜。方十　山田つくゝる子。和

つけ　田作田〜音ゝ田月　郡　久太

ゝきゝゝゝゝ

ほゝゝゝゝ〜〜ゝけゝゝきゝゝゝ〜。名舟集ゝつゝ〜〜ゝ

ゝゝゝ〜〜ゝ論のゝけゝとゝゝ梅ゝゝを人のゝゝきゝかゝゝん

つたなけすゝも　雑芳〜。後後紀　字海字　雑芳〜

つきゝゝなゝる　。方四ゝれゝゝなゝくゝゝゝゝゝゝゝ人をかゝゝとひゝゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]。鶏

[illegible]

[illegible]

[illegible]

表をたいしとへとつよかくしこひをつくちハうかとけと。月五生ようつはぐ
おきうも祢つまりくしえきいすえ。後紀宣命 祢移生。祝宵祭言天系ル 祢因く
九衛く。淮南子云九人之志各有所繫者其行也足躓越沮頭低植木而不知自知也
。万土くるみちハたふむくちのなくもかもなるまつきみううまつまはくよ。月四いひやらむ夜へ
をたくくくくちてつまく。月十三馬角よのつはて 端をこてハと俗ようハりてとりくこの
とちてつま衛せむ夜へのくくたをちてよ くくひのてく。万一ろくの河まをちてこせ
るまきのつてをくくくくれいさるつくりと
。あのちくをくくと合ていくと逆ちいるくと つ先 端く。月秀うちくくの宮あの拾ひさい
るやちのつあちるやたれろのくそれと てまやこ。俳馬柴 竹川のくくのつのな
くくと。万九大ちの移ないへをハと 乃を言ま。九川ハつまくハくと
たるへ つまた 橋くまちの約むをてつむく。万きをとめらつる
むう つまたく。月十四高のををきくんやく山田くらを つみつらし 揚板 なり
。万十四こひくけハきまをちらやこやきちやく
くをつくくかくくくれとちまるむ つくあけ とりあけのさちへし。万廿六くの
あつくく。万三 採生と くくとハみ芸のまろうつくあけかき
をつむくけくくう つくく 九角く。万廿七ようつまくハとけてちをこうつくくをん
ちつくくくく

くさを馬くひ山ゐこえ春ハ尽のつゆいやりをこ。月廿ことうゆくきもつうひて

○月を雨あらをまつひまをる。文選注行園亭記曰風者天地之使也安能徙之

つく

ほとと　○方五やくくやくくかとうくほりゆこよやくく

○御伽草俗ようてぞるよくくて。伝より

つぬひや　庸人こ。方式ぬ人のうと

ゆこりハあまりえてわき

ハ春ハくくちり　○日仁侯弱冠吉夫何於矣自注弱冠謂女者

にたらきや

つほ　夫人あくいうれされ西しりみこ。日

三弱を冠三四歳の男子の美。古上

かしーおそれきて夫りしー。方二わくさのつまの女とを月をたきて男ハ

月ワくくあこうつきのまハ月ーこ。月つまりハ春ていとりこ

こうつこくくりとこ。月丸つま

つまとひ　第周こ。方伏くきを

つまくくこ。月ていこ

つまを子とと　あもよくくこ。方五そきや

つまりよくくたくくこまつらむ

ゆこりをこあらくきけ。月ていこ

月やーほかくれれる。月をもつま

つまくぎ　春竟こ。古上八十月の非のこと

らきあさつ四ようとのをうひて

いやーまくくつまきかぬてど

つまをほ

あを物花こあと花をそのよ。方十

つほぐん　春偶へ。日非什

ゆきれハ衣をてーつまかむとう

きつくこ矢よ。方七わうやよの美稿

を花ふあむにうわぬく称ハくくーこ。弦拠坂こうよちり

つまとひ　春竟こ。方五と

くく花をこうれハ根ふを風のつきとさおむ。花共根共のさ

ほうつ人まつらさ

ようのあつまこひこひをふり

ーーりれへるやまれん

つほわつ　春あこ。方廿

とりうなくあつまをこのくまれ

かれ　ーーくありけむとーのをちこうみ

つきひくをを　月人壮士月のあるこん。方十ゆつこもかーーあまちをつまくろあきて

まこもりをとををやこ。月天のほよ月のふねらげかつらのちかけて

こく尺四月ひくををこ。遊仙

垣城。俗ようかつらをとこをを

つきのうちのつら　月内之桂こ。方四月ふハ尺てよふハ

とらきぬ月のうちのかつらのこと

ぬ味をのらくこもむ。和月中有河上有桂高五百丈。古今久々さの

つきよみ　月後月の名こ。日

月のつつらも秋のちほををちちれをやてやまけるらむ

裏次七月秋一書

月月ふ月夜ふ月後ふ月後る。方四月よみの光をきませ

つきのぬね　月新こ。方七天の月よりの

月六あのふまれ月よををとこ。月十三月よるのるる秋ろ

彼十月新。月三くきの山

月の舟出。月十天の月ようけかつら

つきろねがくにいたなすぐ。方十一

かち。懐風藻月舟参務遠枕機後震演

月尺

まハ恋れるーう山へちりうつくしもをへ

月新吉こ。方四月すし川

なりくる秋。月十八月ーくるかちり

つきををー。月十つき歌

月傾こ。方十五山のそにつきかさふけハいさ

ようなこ

つきかるぬぬ

ときに

つきにむ

かひて。万十七ぬちまの月ともくひてほくきれ
ちくれとなるけしきやとけみも つきくちちる 月を流るる。万八は
しをうぬのきるもる ちくもちにけり。古今 れまひのきうこ月とちるけり。日たちの
ろちも月とちわくる 去ろうつぶたくるむよ。月経 ○和月水伝説利

つきかさね 月累ね。万十月かさねわをよ妹
まてにあらくぬいつきひらくて つきひとみはく 月日数を。万
まくへる夜八。月次のつきちり 十七 表示のうろ
ろ。月四月のとよみてゆきてこまをを つきひえり 月日擇ぶ。万十月日えりあひ
男八あひきくもも。七夕 てあれハわれちのそやる
ろ一れをえろくそろ つきぬ 月を付ぶ。万十ほくきれかけつきぶうち
かけよひりとさくるつきちろつぶぬ

つむじ ○万二その子ちくく 飄つもつまきわるくれりくまて。字洗脚 故手自が世。日牛馬
絶。辻風をりまるくくとナ字街路 旋毛教手自 ○日神石 遷手松峡宮時 飄風怨記。日仁徳 於是 飄風怨起引
を辻といくる旋毛のきちるくふら つもりきえゆく 雲の消きく。万二雲ことりあ
といへ つもにしかきて 雲ふ枯命ミくハ脚絆。万十 したるれきてゆくへきえぬ
るまくしかりて枯ぶきし つもりけごろも 雲ふ枯命。万十 えまの

つもりひごろもく。古今山 雲ふ枯命。万十 ふるもくきいつもとくくとくくしたもの
わげころもとよ。八山道 るる消りてもくきハ雲のもとあるくくをりふまり
山川とり伝くくはるるハ山るくの川くをかつもるも
くくるるるくくくる。万六 ふ後雲よくるるくくの。日 雲くくもの枯くりくく。日十 枯くきハ
くくもれひてちりくくとりを。後丹多れ
よ雲雲枯の雲をりるといくハわくくく つもりいのち 雲命ふ。万ちるくりてのちる
ちもつき あくもくくくくくくつもりのいり
りわれ つごくもる 月鳴 ○日仁徳 数ふ。万十くくくくくくく

やと　地名雄鹿。○五月ころ。やまりつちぬあるも
○月三ツ。ころ。ちりつちぬあるも

つちにおちたるもの　蓬地歌。○五月ころ。ぬる水
○六月。

つちにおちたるもの　置地歌。○五月ころ。ぬる水
にいるともつきこうたちれ
ちまちのちりのき麥生のぬかい
きぶくもつちにおちたるもの

つちさへもけて　土副制面。○五月六
月のつちさへもけて
くるときハ祝ようけてつちに花ときハきひをこうつ
てる日にもい。月令　仲冬月氷益堅。地始拆。六月つくもの
いえをとこうにてる日まこ祝ひをやはをあるいて

つくるたうみ　堤有作。○三月花の
はをくをつけてるもの
やはのつくるはうつ

つゆまこつし　圓月。○月晴圓。○月晴。○六月晴。

こうこうつけきこうこうるつふまいしのこい

つくる　構屋。○六月。名付をとをへこつくる
やうかをとをこうしこうこうるつ

つまや　妻屋。妻屋又母屋ともいふ。ての端や
う夫いたかやうのあまハ端屋ま
をれいかるこうこる。五月花つ
月つこうもる。五月山。月十蟬隠矢也入。月山
たてうつきうは。和規物式乃本本久堂作り也。月祈切つくこうぶまりやをこうへ。高下つくゆうり
こやるてやりと。秋葉多ちこ〳〵ハこるくさこうのをあつさこうつきゆみこるこうし

つちくれ　時記。○和時記。秋佳名。
概さ八十張

○弐甲斐
衣をるこうむ。月十鈴さな多ちけあるつぶこうさの。月土月をのかれる
今。後のおこ
をいをこうこ

つげ　黄楊。○五月ちされいとこうへこうぬつけ花。月九つけのおこうも
こうもこうこうこ。月十九つけこうこうこうこ

つちと　土孫。城波里名九。此間云和名抄。本草云孫一名牡蒙又蒙条。土月花ま赤と又白条
似牛蒡蒙花白色若花有早

ぐら　黄こくはうこうの葉
藕餅之更牛蒡類黄野。常取作湯餅。物大臣。て
つちくこうたけるこうけるこうちてこうさこうゆこうさこうこうこうはあるれ。五月十四かこうけのあるこうこ。つ
らゆをひろこ。和耳觀。久ま。こ良。竹俗云。花。てあみておひつやこうのこうのこ

つくら　薄荷。和半蟬。時伊波。自一三毛紀。自月苗半ホ。自一五乎
こうこ

つぐ　加。五月三。こうれにはへこうこうれにはへこうこうこうれにはへこうこうこ。月十三。こうこ

つみよ　堤立在概。○五月十二。色のつ
○月六月。こうこ。月三。こうこ。月十二。こうこ

つてるつぶつき　堤立在概。○五月十二。色のつ
義解貢換今　凡堤内外手提上
多疏拾抑雑樹。こ

つぐれ　草花。○五月。草花ぬくわさちこうホ。はぬけるつこな
こうこ。月。草花。草花をこへこうゆこ。月草花をこへこうゆこ。月草花をこへこうゆこ

元。本草和名菓味子与毎比
いてくいとりてくいしとう由 つた 海石榴。李德裕平泉記凡花木名海石榴
和椿 故皆本名也 掃部寮式 海石榴 本朝式用之。万七 いきの山つくきさらやつ
をこえ。月こそ山乃つらくつたとつらくよんつくりかなこそ乃まそを。日天武十三年三
月壬寅人ノ字直ニ貢白海石榴。石榴ノ
つくきの世しうくやそんこ原くやのうん つぼすみき。万八山ときの原くる迄へのつぼ
ひとりけり。本草 草菜俗謂之草葵。椿ノ実つるをうれ ちるわ似くるそのようのうう
しいと。和名義 礼記 孝経のうちうん たりせあ一用一ちるへし。國ちうれちて俗ちまさし
とりいとき
ちるいし つまちゝのよ。万 たなちりかさしむ。日語ちるさしむ式への枝形よとちよ
けかもつもちゝの石八。九ちと云へり
とくしひ又ちるを原をうて方 つぼ。万十九 道祖庚竹見嶺上 竹以一首自
まうをこんれををへて年つくらし 注竹名 故万葉 毋本考詳。日いうの上稿つ
ちつつきく駒ちつまつく。ちゝ中 浪のちをうゆつん 神さひのかり。新撰字鏡 竹 つこのさ
えて 椿をふ椿ゝ。万三このちるよ
あらむ。和 毛詩注 桑椿 豆美 蠶 豕食之。救荒本草 三椿 枝條多有刺無葉

葉 草 本 而 待 之 殷 書 淡 菜 椿
皆 三 双 赤 提 飯 鬱 ゝ つら 首之 出 ちつらくれかつらの原ちるとい れとちるとい へもも
日 徒 体 まさきつら。古中 ところ ぢら。万 さちるつつ。日九 さねつつ。日十四 いくゆつくゆ。日二 椿ら
つちをとりちけ人人ちのちをちる人ちひく。日十四つちちちるゆゆ。日十五 ちちつちのたえ
もとれ
とへや つるちみ 椽。万七つるちみのちぬちゝ人ちくちゝ。日 椿のときちひ
きぬ。日十二 椿のあたや衣。和 説文具 椽 豆 説文 椽 豆 説文。 椽
椿 て彼の葉をつりる栗の刺のやうちちのゝ俗ようちりとよちはて海ちら
衣ゝ。法華経 のたうちゝきハつる。ちみのかさしゝへさうゝ。今 義解 俗 今 凡俗 凡 聽
実 本草 も 説 皮 黄 及 壊 色 ちる 衣 謂 本草 黄 椽 椽 一 疋
椿 椽 一 平 五 年 苗 大 二 行 灰 五 年 彩 二 百 廿 行 武 赤 白 椽 青 黄 椽 ちる 椽 つのぬ 東 鮒 二 拔
砂のふちをりゝ。万四 実 よゆきちつる四ちいまや 鯛 魚 ちひさきちの
いちうあちちちれとれる 唐ふしつちちちつ つなゝとる
乃 流 ゆきくちゝつちゝとるひゝ
のゆこてたこのゝま。神 地 名 つ 八 つちなのぢら 角 竹 ちちゝ。万十六 流 の
きぬちてつのつちちちつ
ちちち

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ロさるゝのゝ人ちるへきゝ。方七君
うためてつゝわれる衣服鈴ゝ

てぬぐ

手巾袋ニ。見あそふりハぬるまひなり。方五あま
さるひたるよいつゝせきまひてゝやこのるふり
わたらえまけセ。池中坊都のぬるまひ心ふるとちりゝ。日本代表曲。日聖式雅楽曲公案
刺曲。古ゝ〜あゝ〜ぬり古くつ山ぬり。宮ゝちゝらまの山乃ゝらさゝらてふりをして
ちゝをりうわ

てらさひるけと

衒往来ゝてらしあゝくゝろ。方八きりふくろ
ホひてけるうゝさとゝにてらゝさひあゝけゝゝ
つゝよ六條修理太夫記

て

手ゝ。方五たまゝるえいのちゝとえぬれたをゝり足ゝり
るひゝゝ
ちゝ

まけひもぬゝちちけふのまるあゝる飛ゝつ世間のゝち
月ぬをゝちゝるてこまゝりをくゝ。ゝ。ゝ。ゝ

てゞさゝを

手推乃ゝ。方五ゝちゝらゝ
てたつゝりりてあをひけ
見ゝりゝをゝゝゝをゝちゝつゝゝゝとゝ
む。月けてたつゝさひおて。月ニてたつゝきひゝ。李長芳三絃式

てゞらはを

取手ニ。日伝ゝ
ゝて乃ゝちゝゝ山
ゝを上河原遊子養何之ゝ。又他ゝゝをひゝ
をゝゝゝみゝいゝゝゝきゝるゝてゝゝゝ

かけてそなひつ
やまゝ芋根を　てをのとらまつぬ　よ茅　被奪　方七　うちのうつりうゝ人形ゑたな
斧一具。今も手刎上入まいて　きうりけとゝ〳〵にてそのゝうれぬ。軍旅令
とのをとらゝハうの吉風に

○登

と　利　鎌　渡　杭　方上　或祝日大祓　彼方之蘇木本手焼須乃麻須
去掛之如久〳〵方上きゝしりうをを行〳〵ハうゝハれてうけてとゝろをし
日ナ　アきゝちろとゝろも　こ　死　方四　あれハうらもぬとなさりうね。日時ろゝ〳〵てくされゝ
うれうおうひかぬつも　くゝうゝも。日ちとちゝ〳〵ちも。日セきみとうゝるとゝろとゝなし
日九　ちゝうゝのこ　音　方八　方の川くきつつはとゝわく〳〵。日高ねのとのゝほをつきゝう
ふくゝる日まをし　。日ヽ　杷ゝつまり　秀者のを、
ゝゝよ　こ　よゝつくてゝゝん。方四のちセ山後もあひらひとゝとゝろうゝぬ（きゝうのをりつすても
も　いりを。伊ちををのりうのれりとゝのい又ちちゝ〳〵とれりゝいゝのゝろゝこもも
あり　こ　下ゝつくゝ。方三いちゝゝ〳〵ゝれゝ〳〵〳〵のゝうゝろう志斐伊ハ　と　雑　方三いちゝ
ゝり　まゝとセをひゝとゝ以。日ニをあゝりひゝくゝ　雑僧かゝれゝ〳〵

のらセ　こ　疾　方十　表をのかゝセをわゝらさわみの
ころ　ゝりをてゝてむかりつしれををちゝ　こ　外　方四ろのかゝきをとにさてをや
大めしの　こ　岩　方八まをかゝぬ山のとかけゝ。日十山のゝかけゝふくゝうのこをきかゝやも山
ゝやに　四ゝゝ。伊仲納を和行ゝ。日ろちとへとゆをもやゝまに花掃ゝほゝとかけゝと
ひゝゝれてゝゝ。岩　報　方上　月十四とかりりけゝゝも　こゝゝん　害　外　方四ろのまを
行さにゝるゝゝゝゝ入山ゝゝゝゝやとゝころ。岩は玄冬　ろきを作このめゝさ
ふな。日十二人りえてゝゝゝかゝをぬゝ。古今梅の花をゝるゝゝろりゝ〳〵ゝゝ人ゝゝゝ　ときし
ひる香ゝゝゝゝみける。日　赤代　慍。日　鈴明　瑕。後後紀　外有　宥　紛れ。霊異記　鉄　ときし
は　岩　鉢　方上　きゝゝゝ。日　赤代　磐石。音　上　常　日　堅　こときかへて　解易　四。方三　茅ときかへて。日十　紐とゝ
ときさ　ゝゝゝ。日久茶　ゝゝゝと　汚のひもを
けて　こちにあへる　時ゝ会ゝ。方八　花ちるはよちてき　こちはあきと　はす　有　雑　有。方
ゝ　ちゝちのはゝほひゝほみちゝきハちれ　ゝのを。日十　時ゝあゝけゝと　ゝ
ゝいれゝゝきゝちゝちこひさちひゝ　ときゝゝゝと。方三ときゝゝゝもいつもあちゝ　むをゝちゝゝゝいゝゝき
ちゝとゝゝ子をれきて。ををいつをゝゝいはゝつねと杖のゝうあゝちゝとゝの　ときとあく
かきりゝゝゝ。日はゝゝゝれ杖やゝ人のちゝきあるをゝるとにをゝざゝよと

時雨。万九 けしぬくや
ああえぬるつくえぬを

こきたゝぬ 非時。万八 ワやのとれ
かゝぬ為乃先つらゝ

こちごく 月上 ○月春
非時香菓。万一 けしくう雪八ようゝ上月三 けしくとゝ
○月十八 けしくぬかくのこのみ。月四 けしけめや。月風を けしゝ

とく 疾。万七 ろろ入ゝちゝとく
とゝりけや。左こ ゝちとれ

花やれろきとき〳〵わろむ
ゝゝにもゆるゝゝれ

こち 共。月 林やうはひゝいうまんとやちやいつこゝも
いつこゝちや。万八 ゝ上人ゝちあひ人ろかと

こて
轟。万十 馬のれゝのゝゝ竹きろれハ。月十四 ゝのつゝとをゝゝやして
月四 ゝろもゝろゝたゝる三底。月六 ゝゝゝろ。月五 ゝゝろ。月 林と年タ 牧場ノ

こてみ 惜。 面ゝ
○万九 ゆゝろほのゝちのゝゝみゝ。月 ゝちつきの

ゝゝゝろむ。ゝゝへる ゝゝみ月 浮ゝ

とはくし 雪。万二 ゝゝのほる 彼のゝ
ねてゝほゝしゝゝの忘よ

こゝのほる
月三 猶ゝ ゝのほる月 考ゝゝのふ

こぶこはや 帯。万四 夜ゝ上ゝりて
こぶこはや。月 出ろかてゝゝこ

ほ
ア

こゝむ 駐。万 ぬゝむの為てゝ月を
月夫 ゝろにをゝゝてゝゆくけ居ゝ月夜ゝきゝむ馬ゝきゝゝと矢ゝ

きゝゝ。万一 千世ゝゝゝゝに。ゝをゝるゝつのゝきゝ

こだつ 花。万五 ゝゝゝとゝう
ゝゝゝに山ゝゝろゝゝゝゝあびゝむゝゝをのゝゝろ

つ世のゝゝのみゝ。ゝろ

ゝゝゝなひつ
ゝゝて月

こちむ 向。万九 まひゝて月ゝ花やゝ
ゝゝ。月春

こたる 向。万の
ゝゝゝゝハ花のゝゝゝむ万ゝゝゝに

れをゝれる。万十八 ゝゝれる万ゝて ゝゝゝゝり。ゝを杉のゝれ

ゝゝゝゝ

ちはとさーの異称。ウエて

元をーるをとゝもむし

ぬりたける雪のうちこちりけはてわ

るいひみるーゝ。米とんとゝ

大君はいま

もろること

こきとり 時守之。方土ときとりのうちちはつみかゝわれはときに

はりぬあるもあらし。日天智十年亥漏刻於新台

彩雲此漏刻者天皇為太子時始新作案造之

式條式 法時被撃天武二年初漏刻成学問僧

一。日久条二年歴元戸毋第一基雪歴元此之異提戸毋此之親自

。元年の秋。平家あ新坊てう毋の名もゝ。ゝゝとゝ

とぬとのこち。日雅楽寮内官者。和内舎人字正格利

。後紀大宝元年始補内舎人九十人於大政官列見く

とのきミ。日顕宗蕃五西蕃。後紀

四方之國溝皇は百嗣を継ぎ毛行は加多有

時之。日継体ういゝとにゝをつとりはけゝ

。方十夜のうけぬとに。日土てひちりぬゝに。時之異説ゝ

こーゝづへにける 年経為之

。方十八

。方十七 土山のうり於ける雪をとこちつゝ乃れ

よもあかんかむ乃ゝをらし。日たちやさに

ここゝろとの 半世ぬく。方大とこゝとのこう

こちをねのいやてりゝわち

。方四吾児のゝ。日六

こゞ 刀自ゝ。方二ぬ

ゝゝ。日十六ゝつるゝ

とぬと 今人ゝ。方二ゝぬ

とハまゝ。日十五

陳ちゝ。方九さ

こちりのきみ 遠ゝとゝきうゝ。方土

ゝ人ゝ。方ををとつゝきゝゝ

こ

百六

ふゝゝゝゝゝゝ。日四月ゝありゝて年ゝゝゝ

。日三月ゝありゝて年のゝぬれい。日六月ゝの新ゝ年のゝぬ

ん。日十五ゝゝゝて一度

いゝゝゝあゝとゝゝの

こーのん 毎年ゝ。方九ゝのゝとゝ

のゝゝゝ。日十ゝのゝゝゝゝ。日十ゝのゝゝゝゝ

こ

こーのゝん 年の初ゝ。方九ゝゝゝゝゝゝゝゝ

こーのゝを 年之後ゝ。方四ゝゝゝゝゝゝゝゝ

。日十一ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

こーにありて 一年ゝ有所ゝ。方十九ゝゝゝゝゝ

こーのゝを 年之後ゝ。方四ゝゝゝゝゝゝゝゝ

。日十一ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

こーゆきかへる 年往還ゝ。方十九ゝゝゝゝゝゝゝゝ

。日十七ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

こーちやへな 年之ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

こーのこひ 年之ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

。方十

こよゝゝゝ 世と書ゝゝ世ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

。方八ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

にさきにけるさくらの花の〳〵。方二〇こゝろ入日さしてこゝろひのつくよあきらけくこゝろ
。たゝとゆらんれいをのゝとてゝよあるゝわれもよあまつそてたる人をうふとて。時おもわつわりひ
月ひきかりをくゝをのゝてゝまてもｊ　歳年〳〵。方十七わ〳〵き年のゝ〳〵あ
あるひおまんりをつめし　ことよのゝ　ゝとゝのゝ〳〵ゝゝとゝゝらし雪の
ゆれ　ゝくに　ゝゝとゝ　ここよ乃くに　常世之忍〳〵外忍ハ仙境をもさして以
るハ　蕃　。日欽明　世御。日豊に田道何寺至自常世忍。方四つきもこいゝゝ　。日神武三毛入野命臨浪而往于常
よのゝ〳〵ゝゝけゝ〳〵ゝ〳〵乃ゝりをちまゝ〳〵ゝ　ことをむまゝよひき　たゝむ屑月
なみとをむまゝひきゝ。波のゝゝりゝゝわゝて屑　。方十九おきゝ
をゝ〳〵ゝゝ〳〵ゝ乃ゝをゝりゝを山を屑のゝゝゝ　こゝあゝく。日意非ゆゝのゝゝりゝゝゝれゝゝゝゝのあのゝゝく
。方三あゝの門ゝ月やゝゝ〳〵ゝゝ。日命門ゝゝゝゝ。日四門のゝをひゝ。日六天のゝ
ゝゝゝゝゝゝ。月のゝをゝゝゝゝ舟のゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。日十川門ゝゝゝゝ。日
十六神之　。日常非ゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ぶちどり　太平千載之方四さうなるよめちくり
そのかふくわひをうときにちざることを
ゐやをこえてちゐちよ　こうらのゆ　素虎之方十六
ゐちよりこむつるきちちら　こうなり
こさみあらひぎぬ　解脱衣之方七つるをものとき
あらひきちちやーしも　こなり
のきぬ　僧家之衣之方十四ひとつまとあをうをいとむ
ゐーしうこちりのきぬをかりてちちく十　とぶひ　蛛少之方六いこまやーと
かみのーふひの神寺ゆてんよいまりくるをてつちつるてむ　ゐひかりにと。をやん
○和設文云烽燧　英比也有警列峯之○俗ゐ山のろーしちり

○な

な　勿之。方十三ちこひうつきも。月三而をふりこう
○而うことちくれ　ゐるすちくれ　狂多し　な　下ゑつけても勿く名心。日　神代　ゐちるゆか
み。方九ゑ　もちこうる　ひとうむな
な　初ふゐこのちゑ。日　神代　ゐふちのいとてゐりぶいうぶくりのかつきやを。方十三むさゑきうを
ちぬちなやーこうれも。月六たちゐわやてな。月十馬ちめていさみるゆちを。こかいこれ沒
ーを。をてゆふうゐのちうきいい山とえし
ちくんよちいこえーとやとりとるへく　な　勿詩くゐちをなのをへこと。方コいをのあきの　な
ゐさをゆふうをゐつちふゐりの貝のかをとをうて

名へ。方五名のちさぬ。月四つてさくさくちゐ名のをーけくとわれいちー。名をゐるくちをりふ。日十二こく名のをーけくとわれいちー。月十二こう
ゐ。方九時名振。月四十名姉。きよゐ名あきらけきん　阿蘇　妹名。古名
さやけきゐ名　名かれ名るわふ　をゐ狩れば　なこの　中ゑ。方五うるゑーとあうをふ
ゐひけく　いもをゐ川をちうをへちすわて
をちー　なるのる　無有之ちきをちふ。方八ほうきんちるくく　なるくく　中ゑ。方十二
ちるくうをちーしちかもものひをていこひーきん陸ーて和名抄。月十二
かーたりちわまーをわちきちくわをうめてゆ伊勢ハちゐるゆ　なのちう　少ゑ。方十六
ちくーしちうゐ月　なれちちうかに　なるのち。日孝徒　惟神　月隨在天神。方十九あきの　なのく
長ゑ。方三ちう山のやをえまちゆふーうゆちうのこゆをに　ひつきと神ちうーー。月九つきとゐひちら
ちうくとわちゐひを。月六　ゐをちちうくれひゐ沙ゆ。　なうこと　中言へはちうゐてを
りふ。方四ゐをちゆ者をゐをくちる　こをとをいひさくるを
いてわきし人ちちをきうこたつちゆ　なうこひ　長之。方十二ちをこひーー　なかきけ　月四八
さーくゐれわくるをるき言けゐきとちふ。方四ひとひ　なうを　和ちちごやうちちを
こう人ちをうけちきけをかくきてるれハるをえをへをも　ちふ。方六名ちをふに

ちへなみとせゆつちきにいはへ流る。日土 ねたぶにふたてをもむと和名 おのけきのこ

。伊ちくの流。ちくしまこるからにこそ。ちりちきぬかくらくもも

ばく 歌日。方十 ちらけの人 白ちくしまこと なぐる 鹿。方六 さこつきあろひちくれ。日

くちりけきのこえくおこうあこ ちけきこひもちくるひもちなく。日九

ちこちらのちくくひちこし。四こちちこ なけのく ちけくしかくの物くこ物

こちちくくさここは八こちの。これいおこ物ちと かたもはしくちけくちり

。方十七 おこのちらやちくくちふいちりくを。日十九と

けりのちけに物ちこくこにもけまきつこれこ てちこちしくとれる

ぬこ。日十二 いとちちへ なごつも 彼殘。方六 ちくこくしけこのこ ちこしやの

なこ。しかこ つくちちの物乳方。殘ちまちこもこあ

あこ。方十二 むしふは。方三 ちこ。方四 むしふをちこ

ちこふこれこ。ゆちくしこ。方二 人をちこ。遊仙 輕盈ナゴヤカ ちし

ちこふこれこ。ゆちくしこ。方二 人をちこ。遊仙 輕盈ナゴヤカ

乃ちに 成就之遊。日 未代 汐 死 見 決男 矣。方九 ちくちのまちく。日あこ

ちのちの殘ま。行 元 物 ちこ ちこ ぬ 見 なぬ人 ちこ しこ かこ ちと ちむ

かに 郊。方 ちのこのよ行ちくこの 物 。方 ちの。日 ちこ

いちかこまちに わちこ ちつま。方一 む 殘ちに。日二 ちこ ちに。日五

さちく

ちにちなせる 物 行 。日 徙 行 いくくくくけくちをこちちちこ。方三 ちをちこ

ぬえちちくりふきちちに。方二 ちをちる小角の名也。日十四 守

乃おちに彼。古今 あきかせちあきちにことの なこ 何。方十 ちきぬのわちしみ

こちこちこちこちめくひちのこひ。わちこ なれてこちに。方十 ちこ

ゆちをちこふひこちこ。古今 ひこちこれぬ思ひ ちこ 准。方八 ちやちこまこし

やちこちわ。わこの方をけわこちあこ ちこ。ここ。かこ花

ちこちをむちこくて えむ。日十二 ちこ ちくくくこちこて蛙を ちこ。日十八 月 板 こ ちこ

ちこ。こ。伊ちふちく男ひはこ。こくくくこちこ ちくこ。方十二 芋 ちけこ

ひこちも のあの約ちこ。日 常 物 美 まこ ちこ ちをこ ちこ ちこ

こひちこちこひちも。方十 ちこ ちをこ ちこ ちこ ちこ ちこ ちこ

にひちこちこひちも又れほきちこ ちこ ちこ ちこ ちこ ちこ ちこ

きこひて花ちこ ちこ。遊ひひも 花の遊ひひ む。媛の遊ひひ

。方六 ちこ。方三 ちこ。方二 ちこ 馴 芝 流 。方三 ちこ 川 わきに ちこ。日 ちこ ちこ ちこ

ちこ ちこ ちこ ちこ ちこ ちこ ちこ ちこ ちこ ちこ

なづむ 順之。日に従ひ

なづて 撫之。日後代直之公子志賀津彦命

なすにまれる 何為之。方花はさけともなすなる

なすにしかも 何為に。方四こひしなむるわれたなしうたにせむよ人目ひとことこちたくわるせむ。日五

なすこや 五六天之のく。日八ちくしうもてくくうち

むに 何為に。方四こひしなむるわれたなしうたにせむよ人目ひとことこちたくわるせむ。日五

なすにとう 方十ちくしきまさぬ君をなすにとう

なすにとう 方十ちくしきまさぬ君をなすにとう

なづび き 靡之。方七山代の泉のこまけわ

なよ 方二時う門こむひまけ山。日むまたなひまゆきこ。日五

なづむ 順之。日に従ひ。古中形度美みれ時の弱なるゆけいこうちなづむ。方二いうねさくこみて

なづむ。古上天照太神堅庭高市放命股肱那至美め洗雪驟数而

なづて 撫之。日後代直之公子志賀津彦命

なすにまれる 何為之。方一勿なるなるよりなるたまむ

なすにしかも 何為に。方四こひしなむるわれたなしうたにせむよ人目ひとことこちたくわるせむ。日五

なすこや 五六天之のく。日八ちくしうもてくくうち

なすにとう 方十ちくしきまさぬ君をなすにとう

なづび き 靡之。方七山代の泉のこまけわ

なよ 方二時う門こむひまけ山。日むまたなひまゆきこ。日五

なよ 方二時う門こむひまけ山。日むまたなひまゆきこ。日五

なよて 並而之。日後代

なよみむ 將坐之。方七椎まこ

なよて 並而之。日後代

なよ 方二時う門こむひまけ山。日むまたなひまゆきこ。日五

君を存
ずまを

なるらん　亟こ。万八ひさしくて。日三秋ちら
へて。日土ひさしくなりぬに

なるらし　平人。万九かつしるの
しるのあるあるなる

らしーこつくまーけむを見ふーしわるほ。日あはりはわれこひもるをはりやまいし
ゆくちらしーあるこえひをん。日紫神時官軍中衆而蹋祖草木因以手甚山曰鄭敬山。汎
蹋跼此云布
踏跼此云布

なるり　せのをを変詠これきてたに
たきてはたりこれほーを在ーを
ふいひ実は在のまのをを保るせとつ
傷浪よりとてーもるよをくかを
はせのまを考者ーは傷後の時
よむ家にわーをる為ーをる放方を
もをーー。凡なりーーよをつのあを
ふるを。神のをりまんをよをを
姫命北八月和逸ひーをひ。をうを
くーをりかーをよ。ををのくをを
ぬや　成就ー実のをるをよ。万七ーこの
なるぬや　尺をーーをるを。日むるのけをーをををいひをーをのを

なるるはやまー。ををなるのーーにかくへをーれほよ
なるのきのをりもをりをりもゆをかーをらをむ

なるりもをりをりも。万十四を山田のりけのつをにさんををなりりりーいをもを
なりもをりをりも　ふりをりもをり

なるみち　流淫之。方十九　みとろく先かぬつも

なるごと　不注者雑之。方十九

いつも　ちりのくひけいたハ

ーとハかとと。方十いてるのちハ

あまよみかりのちきみへみ

なごりやし　長寿人之。日仁徒たまきたちうちのあう

なとろハをを人ちところハ國のちくひと

きひとかるほ　。方十ほくきにるるくくとにちぐ人かるなや。日八あー

いきの山けとくきんちちけハ家ちる時ーるよえるほや

る　寝有之。方十いちさむを。方一ーきさへの花ときてちやる思うも

。日十まちひみもとちかりてやいーちるね。日十わを待とかもらむ時を

神代紀ちる時ともつるるるーー。方十四ちやのこやとりのえかちし

ちるたちん何をぬしかくいきつくまてに。日九ちーむよ第のことと

さんよーーとつるう むちきとり先セ。狩衣ちつやセハ

ちセちめくくしにるやかくへちーち風ちとか人もあ一ら

七賢人之。方三いるーへのちーのかーこそ人ちしほりちるまハ酒ちこちらし

晋七賢　嵇康　阮籍　山濤　劉伶　阮咸　向秀　王戎。これらへるちるへし

ちるとめ　と人行ちよ之。市　やまとのたちさー

ぬをちーゆーしをーちるもー

なりたひ　詩集之。方十九ちるつ調ま

つるきーつーちりーとる

ちのちりえひを。日五ちりをちすきれ。日一羽主　嘲嘆之先

車駕　未可動ーー。日十九　作田。ちりのぶハ上るとーーら

ちりちとをとめー。ちちぶををめとよさん。作文稱沢六月のちりと

先くはる　催馬楽　ちちる時家のちくくちち。文題　ちち和妙　雷　碾　ナリハタ　メヒテ

こちと　名負取ちる。日非代　芒八次酬　芳今苗裔　話集人今　奏ちふ　雖天皇　文檣之侍代

ーー吠狗而奉ち者せちー。方十五　そやと人の名るあちとを思いちーちくちち名をのりてーまと

たの　ちちよ　長恨く。方十ちくとのあるちちとれちちちむ枝のち枝をいりんーあまハ

まむ　。日枝ち枝をちりーーくらくとつちりにーえをつくやかーーりけセ。日核之

ちちちひもとくくものをちちちけと

丸ねりきをるちちちこの枝を　ちぐる　雨風雪雹雷電ちるるくくちちかかとと。方十五人

ちのの天ちり雪ちちうれくるかも。日十ちかちと

ちちちうーむくに。日ちとかくはをこちちハちるるちれちりす。日一ちちちみるつまん風のさむ

けきくに。日十　橘花ちりちちちるるちるハ仏の花ちも。日二嫁ち

久ハちちにちちれむ水仏のハちちれちことけもんまてに

。日八清水のけめ（きちのを今まてにおりーへめれハ蛙ちあへち　なごつき　九月之。方十ちつきの

ちつやれちて見日

本の山のとこちをこまくーーもとし。日ちつきのちくれの　なごり　霧四。方十九ちのえ仏ちくく

西の山きりのいちせきりつもりぬれちくんハやまむ　ハちちめのちくあちよこ

なづちよ　長世之。方ふうろくいをしあるれくつきを
世をたれいちうき世のかくりくつる

ちづちよひ　永日之。方サうの花
ささちる雲のちうち

ひをミい　なげきのおも　長島之霧之。音五　わきつ尺　疎くふきセハわきもよ　ゑけき
のきりくあうゆをものを。日神公　吹棄　氣噴之　狭霧

なつ

ゆけや　文々往裁之。方九とう〜へ文をゆけや
哭衣裁をちくれ山ふるもむ人。供をよ

ちくよ　七世之。方ちくく世を伝るをよ
方ちれ　わ大をハちくまま

きさ
ぬ　なるかみ　雷神之。方六　神のれとのくきくし。日十四　神ろくとろれ。日十九　天をを波
こうろふミおくく　ちるかのくと。ちをてくくひいをゆるるかえちちかみの

れとのくきくて
あおくをちみ　ちづち　長道之。方三　あきくるひちのち
ちち。日サ　ゑのちちちいあかてめも

ちくど　中淀之。方四　とと巳
ハくくくちちるう

小山田の苗代ものゆくくて
。人のくやくひくめをくくえり

なづて　長もしよハ掘ちとよまて道を人の四支ちさ
よているちくし。ちれるを五十六股とりよ流ハ俗之

ひちまりあとしてもけさう。方四　れくのうミのくほひ
乃かくのくくものよれりやゆむうちちくてを

なぎた　激之。方三　地のちちたくよる
波激うやふ　文山へ。方八　文山のあれのちよほと　ちくりのうぶし
きちくはのう　ちくやのうぶし

七滝之浪之。方五　まちち川七せのくいくもむ　ちれハくまん君をまくまむ。日七　ゆ日之川　ちくちのよ
たくくこ。日十三　川の流をちくせつくちてくこ。行海神之大七流れて流とて
七ちれのちのまれくり

ちくみを
ゆくくる　なくくろみづ　苗代之。方四　山田の苗代ものゆくくに
くくて。供家くちくゆをかくくる之

ちくみを

くくら　浪之。方七　ありくくんちくミをかくこ
ちくち。日五　ちくてやいちむくくちくきに

なくぬくちくバ　地雷陶之者之
。日五　建れくみり

てのやあのあちかきちくくくみちの
くくりくくちれむくくえかき。日之　乗

ちくど　洋之。方七　きのくくう無ちくくくいかれ
くりくくちくをけくくつるかも。音歌を

ちくた　文天給元年　賊船二艘　紙之　役行者之多　家舟　暁道　疑入　帝元。源之百
ちのくくるをぬくちくえ　高に仕久　ひきのちくくもちくと

な
ぐや　長屋之。方二六　橋のくのちくやくくあのちぬし
うくちあくれくくいかありくくん

ちくひやくど　国中　板之。方七　ちくくちくん
やくくくをれくくちくひくたて

ちれハくく。方五　ちくちくくくつえのふほくくを
ちくれ　板戸をれくひくきくく

ちくつえ　中は杖。日恵神　くくてのちくつえのふほくくを
。ちくちくつえ　ちつまをれくを。方十三　ちくつえくいくちけ

ちくた
水恭之。日天名　ちくものくくやかのくくくれハくくくを。方三　くくをくちくた苗ちくくくひくし　杖いくし
ゆけむ。日十四　ちくはのぬまれくくをくくを。日十六　ちくちのあつくの。和　藪水茨丁食之　浪消　妙云

水葱 ねぎま 一云廿解 葉ゑ廿殿月。式 供養雑菜水葱 吃。本草 時珍曰水葱 状如鹿葱 苦 瓦或 葉 茎 盆
赤 叶 形 。 敦煌 本 儲 云 保 蓄 入 夏 生 苗 中 六 七 月 末 茎 ほ 蓄 沙 後 演 根 無 根 了 汁 ゝ 。 俗 ことり
葵 ゝ も 精 硬 ゝ ゝ 云 ちつくさ えぞ ゝ こ ま ち ち く さ の あ い ね ひ ま ま 是 ち く さ の
云 有 白 花 有 ゝ 思 ひ ゝ ち く て 。 月 ち く さ を て ゝ よ ち く て ま ち ち ゝ
裏 ゝ 云 六 ゝ む ゝ く き ち ち ゝ こ 種 ま ち む ち の ちめで ゝ こ 乃 竹 く 。 和 瞿 麥 一 名 大 菓 ち 夫 ゝ ん 一 云 ゝ れ
ま ゝ ち ち つ め ゝ ゝ く き ゝ ん ゝ ん ま ま ゝ ん 。 と こ ち ち の 之 乃 手 集 住 ゝ ゝ ゝ ゝ
。 方 十 丹 へ ゝ れ ハ ち て ゝ こ の 花 ゝ ち ち 。 月 ミ ち て て
乃 ゝ 花 ゝ も ち ゝ 。 と ゝ ち て 百 ち ま ま ゝ す ま く ち ち ゝ ふ ち げ
ゝ ち ち け ち の り ち 涙 廉 。 日 ゝ 恭 時 人 号 涙 廉 謂 ち 絶 利 芳 毛 也 。 方 三 み さ こ み い う ゝ 工 七 部 芳 ゝ 。 方 三 ち く ふ ち ち
ゝ ち ゝ へ ゝ ち の り ち ち ま ま ゝ ち ち ち

手を射矣矢而發弾丸射之射之止住方丸。方十三 あ〜ゆく切のもさをとる
ことに取わたんやちくさ〜わるほね。日たくるさ乃とほさ乃りみて〜 なくるさのた
うら 七枝寒〜。五よりひとのたゝくこゝ祈ふ七さの交をれハすにせむる
さ乃ハ金浪 係清 車渠 馬瑙 珊瑚 虎魄。これをあくさとよう なくるる酒
七車之裝のあぶをゝ。方四こ
ひくををちくくるほゝさる なすえとりつけて 環元材死〜死人をゝ。方六
さへゝけつせゝもいちあつのひゝ〜りてむきゝ 馬〜とのをゝとりつけて なへ 渦〜。方
あむさむ。和 鉈子 供之寄閉 俗云寄活寄信温番〜 去さん

○二

に 不〜。日天智いて仲のくいあらにゝ。方十七 梅乃花〜やまとゝ〜に花をゝやかくの〜と君ハうれとある
にけむ 飽 に日かゆきゝくゆぎえつれとをうもわかに〜ふせ乃うしにゝ。日十三 〜ゝ世をこらくををち
に。日十をゝとゝゝくゝゝを 者をにゝふ俗。方七少可者有來。日十三可者在來。又ゝ〜ゝにてにの
寺に。日一五三。日十六日白十 に ゝを生てに。方四やとゝ乃ゝきのゝとゝ〜秋風もいきゝ〜吹者かく
てゝとゝてゝる。日二かくゝ。ゝ乃ゝ。方七不有者る山乃 に 於〜。方七乃くの唐にきこく舟を
先ゝ〜きゝて死ゝ〜ゝをを。も外ちほ多〜 に 於ぎゝをもゝ。も外たほ〜 にきびに

。日教明 和親。日五十 富貴。家内乃よくやゝきゝとゝのゝをゝ
〜 。方一 系伯に〜 気をゝ乃りて。日三にきひうゝ家やもゝてゝ にくむ 憎〜。方十里人のこと
乃ようにやゝ乃ゝ。むにくかゝ乃ゝに。日わゝ乃ゝ人神も ようやつまをあ〜蛇
にくまんゝ〜をやゝ乃ゝ乃ゝ人乃ゝ。日稚暑 温美。霊 景。文 荒尓。も
もはゝきゝ。方十にこゝ乃ゝれゝを にこよこの上 むゝ〜ふをまにこやゝをにゝ
うゝて人乃ゝ乃ゝゆゝ。又に乃ゝ。 にゆゝにをみて。方十六 者をこいにふくにゝをゝてゝ にげ
。日十八 花乃ゝこにに乃ゝを乃ゝてゝ

のほゝ 逃暴〜。日雑暑 乃ゝけのほゝ
〜ゝ乃ゝ校乃ゝをゝ にゝ 者〜いにゝの上罪。方十潜ゝ乃ゝ
。日十潜 乃ゝ。ゝ外いとゝ乃ゝ にゝほ
冊之稚〜。稚ゝをゝ乃ゝゝ乃ゝゝゝこゝいゝ乃ゝゝゝ乃ゝ稚ゝの乃ゝゝゝ乃ゝゝをほゝゝゝ
人乃面ゝ乃ゝ類ハゝゝゝゝくゝゝゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝ紅乃紅乃類ハゝ。人の乃ゝゝのゝゝ
をゝゝゝゝゝをゝゝゝゝゝゝゝ

はな舞へこうそうなどにハ〳〵もとゝ。月三けひの海のにえとくるうー一木之もとの海
舞るハなちし。七日和とりもゆとの波年なるを〳〵夜の夜なるこ〳〵〳〵さ。弁慶の家こまんこと

にひた

まくら　新る枕。万土つくさの新る枕をまくらとそ。そくを塔ちを
をゆ。万中にひくゝぬれ〳〵こらしかぬ〳〵もとゝなるわ

にひくのごとも

加新喪〳〵。万九にひものこと

にきる　握〳〵。万五さらをゝにきわす

にき〳〵海　和魂〳〵。後紀思
こうハわたれくゝら

もれなくつゝうもゝ〳〵

にき〳〵

ちてあくゝちにちくゝらうちたな

ちにきくゝ海のたわやあわれつるのゝくゝま
。万九にきくゝまのころもさむらに。日非四三和魂

にのくも

をゆ。万中ゆくされハこ山をさらぬるぬを

ノ〳〵にしぬなあけてくも大なる海

西次宮而を離〳〵。古下やすとへよ西次あけて　こ　出〳〵。古
ちくゝれうきくゝわくもれわちれをやし中和

佐紀ゆを初土考ちをあるらけゝ〳〵。和　歌名芸黄土而和密昌埴　沈水。万五中黄土

赤土ちてくゝもしよるハたる紀の祝の中考紀。山海経冊味ゆも馬白皆冊之新

出て。日三金殿

とくゝうこは

にくくつみ　湾〳〵。万二にはつくくなみくくあるつる。日七教くくるぬち
ぬ雨ゆをにくくて〳〵。古下水潦。和潦おは太豆美。日潦

にひむろ　新宮〳〵。日新宮　熊岩文新宮。日雅室　私記を新室〳〵。日之表　藤千新室。万土新むろの
かくくさかりくれりくくとき。日西にひ

むろのことさ

ゆくくさ　にくくとり　庭掃ちゝ。然をり人家の庭ゆをゆ〳〵。古上にくくとりかけちるく
をてくりきくくしにくくとり。日徒年にくくとりかけハちくくとりかをつ

つくかけのくくをのくくとりをの

にくくゆ　庭蒼〳〵。古下にくくゆくくにくゆ
ゆくくて。路蒼而ちくくとり

よ

新宮新宮。万中つくくくゆのにひくくとまくゆのきぬ

にほくとり　鶏鶏〳〵。和野鳥山而好設あゆ著〳〵
。古下美本杵狸絵かつきいな

つき。美とあくゝ。万中にをのかつくいけくつ。日五ほくくのふくくちくひぬ
。日土にほくくりのうあくくしくる。日十二ほくくりのあつきひるを。日廿ほくくの高芝川

にこくくは　和美〳〵。万土あ

しかをのちくくのにこくくにこやうくくれくくを中てくくく

もきつて

にごりるさけ 濁酒。方言 あるあらきたること。ふるもつきのふるるさけよ

考らーも

およまさら先や。日ふるーたるなるのわるそんにこつ切のにこれる

こけをのむ〈〉そらし。方言

濁酒一杯は茶一杯わ茶豆茶

にひちめ 新畳。月代新畳祭。私記 新畳者是野穀既熟乃後饗畳也謂之尓波也今俗呼之新米酒汲之

所謂加也。方言 丸酒 新畳今肆家新米酒 派新言 。方言

きろこのやの元れうるにふちろくよわるさをやりていろふけさ人を

にへ 日上。方言 にほかりかつ しうわせをにへをるあ

ガーきをとにたえんやも。日たんろこのやのとれろふるにふをしよわるをやりていろつこの

戸を。仙元新ち田今ふい出てるときやとしるる人をあつめて初先て刈る稲を賛そーて

食をるこうの日ハ門をさーて人をハうちへもりれぬもるきーらふうとにたーー光むや

ちびころりれあくくーこ。こをれ和雑の仮を月ーー。方にまわをしにわうをやりていくふけ戸

をとーあるこ新米ニ。日え茶氏膳 こきたへ 和仙布へ。方言 ひとまはにさへもろりくひちけ

月祝芭蕉直撥之ま也。皆引蕉ら時ま くまわきくまをとうし。日九 和蕉の服そうらる

すーーとにきくへのこ弱ちさむらしーらもへるう蕉のこーそとと

ちむ〈しにきくへハやくーろちるをふちろ〈しあくーこもくているちり にーぢあや 錦綾。方言九にし

きあちりちりにつ矢るいつきこも。日え茶

さらりとにーきのふもを解さけてし に 荷。方言 大船 あ荷かりつく

日ニ 本人の高白のさこの荷の絵にと

○奴

ぬぎうて 脱衣。方言 たてきもこもこ人さこにきうぬ

うにぬぎうて山るにまるしあるよつき

蕨のぬぎたける蕨のーーふむこ。月三月ぬ

きにぬきつきにハうやうきにハをるにぬき

きの老にぬけるつえぬ

うをーてこをはを

まんむ。月十二 ぬぎ人のきれる

穴ちりいをてくこえけむ

たうぬハちうぢ帯かみこの沈ぬぬきを入つちむ。月十四 入間ちりちぬ

かこちのいくるつちひハぬーーるをこえうね。て俗ぬのるあちうるをこ

川ちみのくうちをこえる

りてきをんやうこ

らハるちりくやこに光さをたまくぬ。月十五 ちこれいとこのへさちにつけまちら

いーちをんちぬーまちりるき。月廿四 用俗ぬ言五 殺山蕨殺をちーーこ

ぬぎうて 脱衣。方言 たてきもこもこ人さこにきうぬ

うにぬぎうて山るにまるしあるよつき

蕨のぬぎたける蕨のーーふむこ。月三月ぬ

きにぬきつきにハうやうきにハをるにぬき

きの老にぬけるつえぬ

うをーてこをはを

まんむ。月十二 ぬぎ人のきれる

穴ちりいをてくこえけむ

たうぬハちうぢ帯かみこの沈ぬぬきを入つちむ。月十四 入間ちりちぬ

かこちのいくるつちひハぬーーるをこえうね。て俗ぬのるあちうるをこ

川ちみのくうちをこえる

りてきをんやうこ

らハるちりくやこに光さをたまくぬ。月十五 ちこれいとこのへさちにつけまちら

いーちをんちぬーまちりるき。月廿四 用俗ぬ言五 殺山蕨殺をちーーこ

ぬ 。方言 まこ。方言 ニうるーーう

ぬうきこ。和 額奴加 ぬ ミくまこまいて言

ぬるとの 。方言 森夜〈

乃風をすゝぐる衣たちん糸ちる袋をかけて

三ぬひつ。月十三 人乃ぬつゝまいハねばてゝ

ぬは ほと。方 古ぬりあらわゝ

うゝ乃栖。月祢式 要害之地

ぬえ 窓。京上ち山にぬえハちぶさぬつゝりきゝ〜ハよゝむ

ゝ。方ぬえこゑるうちちけをれハ。月二ぬえゝ乃のゝ

こひつゝ。ぬえハのどをメムてかちゝ〜く

ぬたうん 蓴。月蓴祢ゝうて母すゝみのいけゝぬた大

ゝりたゝけくちゝ。京伊くゝゝゆゝゝ

きぬちゝん。和 蓴 ぬまは 水茎。藤彩茶家浜三自三月至

七八月田毛の苗代 拝 能歌雲海以後至二月以澤考 朱岩 龍 海〜

うゝりけむゝてぬきちゝに。月八ゝてゝ

ぬき 緯。方 ゝ ゝ せのち

わゝ茎乃茎もゝゝれ

ゝとゝぬ。懐礼 虞 存 之 山 機 雲 杵 織 葉 節。京 三 川 ゝ き ゝ り ゝ 祢 世 月 ゝ ゝ 祢 の 面 を ゝ

てぬきにして。月 雲のゝて 霧乃

ぬきゝゝゝゝゝ。

ぬのぎぬ 布衣。方立ゝゝへのぬのきぬをゝにきを

かてにかゝやゝけゝむゝもゝへゝをゝみ

ぬべる 佐て衣。方五 あハむはのかゝゝよゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝれてぬゝる衣ゝ。月十二ゝゝゝものぬゝのゝゝれハかゝゝ

ぬまごぎぬ 浜衣。京 ゝ方ほん

人ゝゝれゝもぬゝきぬをいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ね

根人てるえん。方十四のくらひてこちかる。日二ひとむわくもこちかひこる。そのあ人

天つちの根をくうか根くいるもえなみ

根ごひ 願心。方大光のわたこも

しうね根ひんくらひよい

根ときけくふ 嫉妬心。方大ほく きにいと根くけく

ハ指の花ちくときに きかぐくともむる

根もごろ 懇懃心。方二わきもよのさとくしあわハ根ところふしまく

ほしけくこい。日四芳の根のねもころし。後後紀丁寓

。芳芽れ柳芽乃根とれほくつけくかろのくくひハ根の

よくかむこのまれハうの母のことくよるめし加ともめ

人根らふうまのやちけハきしけくもきし。方十宮とに

きつをの根らひかーこけと。月八寸岳ニ小高紀しう根ら

根已 按心。方九ものとれ一根り

ちゆゆみ報元負西れ

ひかり力の

上雲人

根ちけびと 侵人心。方十六 ちらしのこのものかたのふと根ふ

かうもかくれも根ちけひとのとも

ぬハ天下もいゆきちかり。日西を

根 嶺心。方の上雲

ふーの方

根ど 寝所心。方十四根と

つくちの根らよつくくく

○乃

乃 人名のてをうえてふ伊。方三いなくふとをひる主殿又作とをひくりとのころきうてわれと
ひろりり。日四せちのうてもさやうちつ。日西うとかのくむちうしくふものらにと
ろいちのきまて

乃 加へたんより日一。日西乃栃川のかをもうまかりかりはまあつのん
思ひかねつと あへ。方四。日廿ちくゆをるをしりぶちて乃るのんもいへちゆ結を
まとみて

乃ぐく 拭こ。方六 ちくらをしたひるわれやうつきのくへよりうと
りしや のこうむ。日廿まくうてぶちくくをのくひむせひてくい

乃せちて 載持あこ。方五宮のみなるえくひとまひて勅旨載
持あくい。載忘戴之誤ままてくくきもちて必し

乃ただく 曰こ。方廿ちけ きのくはくく

乃ちちひ

乃ぶに 後思こ。方九いまとへさえてのち
つひこ寿ちよけつい

乃ぶに 和こ。方三い風も和ふあん

乃ほる 術く。日 仁徳山し
日一ちくくくものくにくは

乃川をかえのほりり。方いうくにつくりのほん
うむ。日廿ちをえのほるちくま池乃ふ絲
をたくちりまくてのほりとち

乃ほりくち 昇ちこ。方一天のかくゆのほりと
ちふををちれはこの日ををの

乃こ 待く。方三天ちちの神をを待
。日五天津神ちきくいの

乃てくち

飲而後こ。方五ちち柳ちくの花をおりかさくくのくてのくちはちくぬもち
。日九立ちんちきのとほををくいきをりり酒のむとちうこのほかくん

乃る 被罪こ。方三
うもこ

まえむとまのくらくれとこ。日十六白髮ある生をれひなはかくのとしわけむ
こちにのちまかをえや。日ちくてのくすきき酒やにちあくる妙かくこ。のくあ西

乃ふ
祝詞こ。方七中臣のふくのりことといひちえわくふいのちもこう弟ちよ

乃 告こ。日 仁徳 大坂ふあ
なれ。日 神代乃後天見原命学其解除之太祓祭而宣之焉い

やををくあにあとくくく
にはからにさきまちをのる。日三いけよらくをやれくくこのらをこう主変い

乃 寿こ。方二ちつま
まをせちひとくくる。日九池ち若のらくれね。乃はつくるのちちちり

乃 人の若宮をを
乃若の後ちも妹ち恨よのもみけるかも。日四ちちよのりてわりほもる。日七のりくくくくこ
。ちの人乃人乃くくよあちをおくをりりれ。後拾れくれにそんくのりてこくくこ浪まをもあく舟

乃ちと 上皆こ。方十七あふちちよいきのりくちくこ
ちちくと

乃ち 待こ。方十六あきかりり
。のほりくこを中宮ちくくくくくのりてちれ

乃 こんくのはは
ちくりちくて衣也くくるまえめ。注式

乃 詠方後こ。方八ちは上於八
。後後紀出家之人法乃族也。伊之法之こ

乃 えぬ ゆをくちくくこきぬ

ちはづつま 後之音曲。方十ちをやくくちのちり

乃君みいたえぬ

乃こきるゆま 孫雪こ。方五のくり
くやをにちくくくのちはちくま

枝のえだそやるちりう雪ゆきぬとも。日ハわるをうにさうりる
さけうう先の花乃うれる雪ゆきへつるかも　乃ちセ　後撰し。方土 鴨川ののちせ乃
いまたうれとも。日三 ゆきちちひさりひり　乃むらづ　けし後るあろむ時るハ彩よ
あり後るもあるひとちしも。丁 俗考　飲み。方サ のむうにかとさ。ゑてと。日三
きしくろ人ハのむちよて。祝るる　乃きのちるくは。方土 わやしの麗る太系たれとるひ
ゆけくるの目と先てのむるつし　われくさろれといまるれひん。和覺
伊良かな

乙

乃ともし　喉呼ん。方五 ぬえとりのけくひをうにと。鶏が鳥くあ
をこえん 喉声て 俗名ちわハかくあり 時の方ゑ似るれ　乃ぎたのえ
祇太 系名め 樣山 方 接置 ゑ。日 該 俗式 凡 歌 俗 第 日 老 頑 擇 ゑ 太 祇 祭 後 ち 喜 ひ ち 姫 ふ の む く
より初植乃をつきるのをゆにいれ馬に和ほせてよるを日 凡 祇 穀 て 十二月 に 俗 系 後 て 十 後 九 墓 る 和 侵 を て く
ひて後祇をゆたまひゆるつのちもきるし先一十二月に俗系後て十後九墓る和侵をて
初植えるてまつらるる。奥 郎 祇 いとはちみうひちるえ凡さんいそくくねるこはのふやとしへい
ひけて。ゑるまの方西とりふハちるえ人の母ほを報凡とて年のえてるふるれをまつくゆ人ハ
ゑるはるつりとりゆ家よハ俗日ゆ人ゆるるるゆ。書にも黄て帝昇天
ゑるはのふゆんとあり。日 後 天 琴 祝 ゑ ゆ きてよりて 俗考

○波

は　波ゑるるつ時ハたらハとるへき示るつ人足。方七 わるるるものためき危る 樹 枝 を り ゆ き て ば
おりひゆるみちも。日 大 布 せ の は を ゆ ふ て 一 ゑ て ハ は せ ち ゑ く ふ ハ た る く や も を る 代 乃
地人の下をわれ一かりてば。日 十二 外 日 る も 男 る
ゑるるを元てどうわれこひやまる今ゑちれにハ　は　あのゑきくはる。方四 ゑまりていまさ何さ
しかへさねしよのいるるあれ　に加ちらねハる。日 五 まるはてのゑまてさ
ハ。日ハうのえたもいまるるさるねハ　はるの巳　量る。日 祇代 干 時 八百 多 祇 舎 社 天 あ 行 多 計 喜 字
かかるるる

剥垂ゝ。万十六 機織を五百枝剥られ

○日神代 金剥 逆剥。えぎとるを云

はし 間ゝあひだ〳〵は一。日用明 間人皇女。万 間人

連花。万二ゆ〳〵とかのわらうまし〳〵よゝ。は

まあらうまし〳〵。古之事もあらんに竹のうらもしるんはなりぬべらなり

。伊とつもとしたゆるもたし〳〵。日欽明 同船をもしるぬるとゆめり同間之法ちんう

愛へたりきよ〳〵り茅と日し。古下つもしつまよいしきあるむやも。万八風をふるつ

乃きしにかよへともわたしつまりとうかるぬ。日二祢うるつるむもしきつるしらば

はゝ 走ゝ。万五出たしもいたしとわへとる。日十三

思ねのはいわしをゆ乃よるきやはゝ

はゝん 初ゝ。万廿四見りし

たゆのたしらうまゝ

はゝと 為當ゝ。万二ゝ山の山下風のさむけきにくゝやと

よもわまひしりぬむ。日十六やゝ〳〵もいけるあ

らもをたゝやたゝとやたゝとむる

きをとゝるとゝ川へたゝる

はゝらバ 徴ゝ。日神代 責甚故鈎。日 促徴。万十六

不果ゝ。万三むの行のゝえしやもともをひ

てゝをゝたゝゝゝは出へをしゝをゝはゝけれ

をゝんをゝゝや。日十

はるをぐ 墓ゝ。万七をゝ〳〵もうらぬあるはを

。日十三あつちのかゝもえぬゝとわれ

ひきめてのゆかけにまけはりぬる。日八あゝをゝ日乃屋の

はの花をめゝとりむゝとりゝとをゝ。日三あつひきの山さへ

ひりきく花のちりゆくこゝきりたはきみうも

はおにうむ 花や者ゝうんむ

を花をめゝるんむとしあきのかへりゝけらしゝのをちゝく。日ゝをゝみわゝゝ

いるてしこ乃花をちゝへてゝれをあゝぬかも。日十二むらさきにゝをゝしわゝら花や者に

はちをゝぐ

ゝ 初を思て。万十六ちをゝのひをちをりゝて

こゝりなくゝをのいゝめさきにわれをゝちん

はつゝ 小端ゝ。万四をつゝゝゝ人をゝ

又ゝゝゝをゝ。日十二大舟のをゝるゝまわ乃ゝ

花をわゝをちゝゝゝをゝつかへをゝてゝひ

はつるゝまり 泊湾ゝ。万二

とゝふゝは一ひゝ一ほゝゝちのゝゝみをゝ

やゝいゝ。泊八果のゝゝとゝまわ八ゝゝ

はつゝを 妬垂ゝ。万十六雄略の小白れをゝゝれ

りゝは一ひのゝちゝゝへゝゝをゝわへ一

をかゝゝたわきて。ようき妬をゝゝ

ちゝをゝゝれ一

妬をりゝれ

はゞかり 怪ゝ。万三ちゝゝゝいゆきをゝかりゝゝる川ゝのを

。日 ゆきをゝかりてゝゝを川てゝゝ。日 作法 重

いゝをひゝゝへゝるをゝゝゝ乃ゝゝ。日 景初 ゝをひゝゝをゝゝゝゝゝゝ。万二 為一ゝのいゝをいふ一ゝて

妬ゝをいゝをひゝゝゝと呼りゝ。日三ゝゝゝりゝのゝをゝゝゝゝゝゝゝゝ。日 天武 十年 新自今以後

ゝひ 劒高ゝ

。日 神武

跪礼朝廷

礼並出之

はつ　遠。方六。おくれたる者の山ハ井なぶさ者さかりくと山のへるかきみとるひ
きゝと。月九ちゝのわれこゝとりれきちなとゝをむまるひきゝ。月三
ちゝふんのいや　月上朝廷之。方五。あくこまのそらくふ四井をゝやとちゝつ。月廿。なるふ。月ちゝつまり
とゝなるくゝ　月さ。ちゝ。おほゝわくくゝやつら
ゝゆるこゝをゝゝゝやつんも

はへん　但。月。弟井繩但四方ゝ。月底井ゝつまるちゝみのいけゝぬ
ちゝとはへけくちゝくゝ。方十井くゝゝかゝもすぬと之見
はへてちゝまくけゝき物花時。月五船の
触系陣むゝちけて手繩をはへるぬくい

はろゝ　遠ゝ。月皇松ちゝくゝゝとゝゝ井りる幸
乃やゝちゝゝ。方井ちゝくゝ家をた
ゝゝい

ちやし　第。月数系元峯棟累者此家長出心之林。方六ゝゆてのちやしゝちゝまに
出ゝい　ちやし。ちゝ山ゝみ人をもさんぬゝさゝらいとくをわらゝわゝえちや
さ

むちらくにうきて　つちゝゝゝゝゝうきての出ちゝ。方井あま

そゝて　畫。方八。ゝのちゝ
ちゝ孫ちゝにうきて大ゝけに仕まゝと　てゝなゝるゝさく
ら乃ゝゝのにはひちゝあゝ方に。月三ゝの畫ゝ湯ハ一もさゝにあれゝも。月七舟畫。ちゝ夕ゝれハを
乃ゝちゝてゝゝゝゝゝ

しハ助へ。毛詩
歯め瓠犀。

はちひ 臭噎。方土まゆ初のきんなひらりとけ
ゆらむひやゝ。ちの俗ことばきり西

つくるひよぶね 。方六月つ七夕のつくる巫花ミよ也の俗
乃ち俗ことばにけらんや。

はつや 初え。方戸うまさ
けを三つのちり

くいろまきよゆれしつゝ。るあひやとき。日七こぬさりこわのろろいちの枝ふきくこほ
とくくしくにてんとのとられぬ。日八うまさけらのもりう山名枝りとこちとちきくをしも
日十 初郎名えいちふやちのこちくもえんをえこえて

そぶれ 。方十えうえこよくくれりたり
ちるくくこよえ。た神社も葬のをとれる去の名名
まーておりけ西。日九ちろうのまりくの花う庭るちるそれのいまとのこりくかも。日八俗宮う
ちくれろくとつるまにたならへちるハなよの花うち。麦かるの他乃入仁をめくこ聘をのう
そもちくらよれける初ーも。芝俗集伊ふる係れ武彩仁矢仁おをもるあひくはそ秋田城よ
うりけるに雪はくれよるとそゝ。ゑ人のよ。あるていまくある雪をへくれ雪とよと

はくくも 裾さう又説畫ゑくゝとちてのかよりよ。方ちつくの巫そくくもよ入日さし
とくひの月夜おきらけくころ。懐氏藻大法宮ま遊猟行云月ち駕谷社
雲猟法 初ち。方十あくくきとくくのぬのろ

はつちる 三位義之
まのりよふる雪のいやけよくくち

ちつ祢 初ま。子ハ土ゑ
のちくもよて天

乃逗部乃ち先なれらこにいちつちるくくしく。方ゑ初ま乃
初ま乃りよのむちてきるにとるからにゆらくたまのを

けつあち 初れ。方十れも
けむ七月の七日乃よ

は 埼。方四山のちにあらもちさらきゆくちれとれハさうを乃うあち
ひハわもかるーも

は 初ハ。日六山のちるさよ月をいてむかとわるまち君ハ夜ハちけるく。日
山のえ乃さらえをとこ天のまとちるこうか

ば 場。方十天の川こうの乃ちかだうつえハ
ちらくくちと。日林分ちめて雛山祇ゝゝ

ば 初ちを。日
かちをちむ。夜ちちけにける

はち 驛路。方上ちまちに引舟ちくたのりに始ちろよのりくけるかも。令厩牧令凡水駅不配
馬玉是南葵駅の置延四度丁二度少上徒郡郎丁さ。朗詩駅鈴秋声夜過山さ。日神功石碑
乃役多沙城を徐てあ往是弱駅
。これいまーへ弥乃ちもあたるち

ちこやの山 蘋孤射山。方ちハちしふくのさとにたきく
射山有仙人居雪肌膚美冰雪俸約若処子ゝ。法 らハちやこの山を見すくちけむ。荘子蘋姑
乃ちのハ仙洞を掃てまつれることにかきりて方

けはる 良之谷。日皇極
谷此云波佐寒

はるこ 畠。方十八うちくくもまきくちけもあさことにしほこかれゆく
ゝ。和畠一云陸田波太カ。日神代紀上田。日噗ハタケ又田苑日上

けはちるさと 花瓦里。方八とちちぬの花ちるさとのほくくきんかこひくてるるはくろ
たほき。源たちぬの香をちちかくこほくくきん花ちるさとをとつて

ふ

はわれろ　雑砧。方五たなれろよくけるもろの水ふることかくも
久しくときをとるけるかも。日七をちれか者〻
きくらくこい有男とこらすセハきしのたろのよにほそさすしを。日六ろく波の子をにきよまる仮のたの
きしのてにふまにほひてゆかりよ。和土黄而但寄昌植波々。方土布土小屋。日三使乃芳土のそにいてく〻〻

はひしてヨセバ　灰而不者。後紀景雲三年正月廿日賢人云天夜鶏方灰止共仁恐毋礼止名
紀天武四年道照和尚物化茅子宮奉送
火葬於粟原天下火葬始而於也〻

はは

ゆくかセのいやんやに。方土ろせこう涙ゆく
風のいやさやにさや
ことまりてありんやあるむ。日一

はまきうみ

波陸。方六波きよみうらうるちこ神代よ
ちきりのみをちやしたるとかせ〻

はや

雖陸。方十もこのはのきしを田ふりまきし梅乃ちもかるはてありぬきみうも

はぐ

。日十四ちはいまのうりうちかりちぬとあしふましひるくつえけりるセ

ハあろび

芽子之遊。方十白さ訪をそらハけぬしいさこともつるふきうしてたきのあうちやむ
。後後紀美和元年八月上世高陸波孫号曰芳宜花撫〻。これ後の花の者乃紀

ちなにつく

花ふ徳。方十枕たきの下茶のをちち花ふつき
ときをゆるえのちこひむかも。花ろて後ちうむ〻

はあにほひ

花艶。方廿ろたセハむろつをの〻の〻ろ物にほひてりてたてるいろつき
たろつま。日枕乃ゆに今ところ也ろんをとのふ乃をと女乃花にほひ乃花
陸美ろてを花乃芳蒲ろ物てにろちにさくろ。又つ波ろち時ろ〻ろり
。方四をろちを〻〻さきにろよにろつ花ろ〻
乃ぬ乃の花ろ〻かつ
ろる人ふこひやろらん

ろぬつは

花を藤の花ろ〻とり。方十れくふよをもちろ〻〻
乃ふのさられて〻〻〻きのちろ〻くをも。源
さるの〻つ乃

はあび

朱華日唐棣花方。方四ろあびをのろろひやにきろろちかを。日八
にをめる花〻
ろあびの花まてあをろり〻〻〻〻
日天武十四年秋七月〻朱華此云波儂漢〻

はちはだ

蓮華花。方十三ちちにたよたまきるあ乃
ゆく〻ちみ乃ヤ〻〻きにあふ〻〻〻

はつろに

初花。方八ろろにさを〻〻きたくをつ
にもろち〻まろちりを俗ふろろ乃とて林乃こ〻ちに〻〻用ろちる〻〻。方八
わきちよう業とつれる枕の四乃ちさふのおつち見れとあるみも。傍雅世紀先徳

はつをは

初花。方十七
とて初ろるふんろ〻ふろ〻もちにと。日十七て〻
こういやろつろにこひ〻をつりを。日四初花の了散ゆを

ろつをぐぬ

初房花。方十をを
〻ろの入北のふ〻き

そつてを云いつゝ
ゆうを松よきむ

たびろ 淚菜摘〳〵孤菜と云又はしは薬の名〳〵

はぬ

ひるむ 淚菜摘〳〵一名神之薬〳〵とほく
。方三あうのとてきなつむあまをあら
あへやもいさちかはのこまものるやきくを見れ不可
駿他人皇太用必大根故叶人号淚薬謂赤紫利百毛也

たはけ 淚小鶴。方四こくるる地
へちんこころハまゝとゝくにありぬかも。方五地蔵地に乃鶴の寄こなてうの淚ゆるやあけ
むいくゝとこるかしゝこ。人も紀のくにに乃淚をてよそてれをの乃こゝいくゝも淚のかこなり
たつるの

はまも 淚薬〳〵一名神之薬〳〵とほく
。月名名とうゝ。方七

たはをき 淚菜〳〵。方四神瓜乃以せの淚をきをちゆをてとひぬやまらむ神ら
ゝいて
き淚紫に。雑淚をて以あゝを伊勢にて八淚を我とりみゝ
乃淚あれとゝに平らぬ俗者つるゝ〳〵ゝ以淚ゝ生をきとゝいちゝ〳〵。天本ゝ之の尚ゝ
つ村ゝてる淚をきのちひくやゝなをてひもそうれち初のおにゝきをなゝ〳〵ほあひゝ
まゝつ淚をきハゝ〳〵と

はぬひさき 淚名集〳〵或説ゝあるあかいゝとゝるよのとう。方土淚昌
ゝとあるゝよれゝうひと
にあゝて。伊淚ちゝ乃ゝあるゝうゝまの淚ひさゝ〳〵ひさゝ〳〵くゝなりぬ乃ゝあひこで。おゝるゝる
ひさゝ〳〵ハ淚ゝある家をゝ以〳〵苦ひさゝ〳〵ゝ板ひさゝ〳〵なとゝゝめゝゝくて定家仁のおを引や

これたらあ由のはゝ乃淚ひさゝ〳〵久〳〵くのこゝる林の白菜。庭と
ひてゝ乃ゝ庭ゝとあとのたゝひまて大ゝ乃ゝ乃ゝなきをゝぬ者の庭淚〳〵

はぬちとや 放名〳〵。方二当
乃こやゝゝゝの

他のそなちゝゝ人日きこひていけゝかつかん。日面のくゝ上の他なゝたちゝゝ

はかひ 翠
なか

なゆをゝ乃ゝ池ゝをゝちゝゝゝをゝゝ〳〵〳〵
。方ゝ〳〵ゝく鴨のおかゝる宮ゝゝてゝもきゝをひく

えぐ〳〵 翠暴〳〵。方ゝこゝのゝゝ
ゝゝ〳〵ゝ乃ゝ日丸さきゝむの小坪ゝ他ゝ鴨ゝゝゝぬきゝ
せもゝに雲隙ハゝゝこゝく
ゝゝ天のつゝむゝ。月五ゝゝ

はゝ 錯〳〵。月神代（ハヤヒ ヒメ ハヤヒ）
。方十九
錯廣錯投〳〵。日面
ゝ乃淚ゝゝくゝをゝゝ

はぬまごは 放駒〳〵。方土
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝ
ゝ

かりうゑのちつこゑきて毎出
ふるやのれなきこえうつせこ

はつを 最后之ことほぎ也。方言山よりのをろのをつを
にてうろけくちうへこころをうようけえ

はふむし 昆虫。日本代ハウヒノ口ヒロ 昆虫之殃。日雄果ちふ
むしも大きくまろうふくりふかる孔のたるむ

はぬひ 羽振。方言若ずけてうのかる
しきにさうあけてさうつるく

時こう日にうもむ。月うちえうり鶏ふちけくとかくたえうりしく宮に君いまと光やと。たこさつ
きまろ山ほくきれうちくつき今もちうちなむころのふこと色言二然ちうり風こうしめ多ねふり
浪とうきうれ。月知ねる浪乃声さわくい。ふるのねふりの風ふるものをれちるうより風はまりめう
又法のことをちうくふ。日芳邦新首る寺院学多法故学言延日法振苑又をさうるこうこ了
。方言あうれのわれれむしたふをちり学ふをうををうをうをうりふし
又夜明ちうこうをちふるとい人也。方言死ハちててらてちをくほくちぬちさ——ふふれれ
とうふ

はぬれ 羽濡。方言ほくきれ修羽福ま。ちうりさうしふちうみのん
ふれ 羽月ちくほくきれえくくしねうれくちれ義ちくの孔をつうくこ

はぬぼり 法法ちう。方言人の見のかるしけちふたんとりあちうむ
こまりをーけくちをー。法法ふ孔ちをさしてりうれ

はぬかひ 法見之
。方言羽ちを法見伝説りうちをうふかくる
しいはゆうハうるいてりむちうもれかひ

はぬむ 突く。方言わかるの孔の突よりをむをく
ちうりふちハくれをたいきまぬ。月

十うつをよりハをねとはちらちんのつられる
小田ををむうられ。月五うりちあハれれ孔ふ
標青白色之。方言六ちく孔りれひをり帯成うり
まうとにれひをとられてからふくいちるいふる帯ちんれ孔ちの帯の中ハをちる

のうちなるたま 心れ之内在玉之。方四くはまうちたひにハいれハみれれを
もちこれうちちる。むこうれをほ四。月七白むをるにハ
まうちに第ちのもれけりーーうたまれれ第
る。論語 美玉有於斯韞櫝而藏乎ちい

たうきりちくくーまうのこやをたちきみうへて。古上天君日令天法父朱命一
人天之法土ちう殺真庚児矢ちい。神代紀手捉天拖ろ天羽ちい矢ちい

たーら 柱之。日神武きとついちねよをちーらふとーきて。日駅学第生
孔者此家長内人之結之。方サまけたーらほあてつくきるとの

かこといまをちとーー 横之。日武天紀 れはうきしのこれひのちちちむ
孔ちるかちりを次

はる 法ひられたきやーーうあひたりハちくに。方七
をとめらられるちのこをまくーをてりけちくーまちくまちりこ四。月十いにし
へちりてしちをこのりよへ衣ちぬひて乃まつりれを。月けちちりくちてぶちちゆき

てあまの河うちそゝわけきこうこむとめ。日三いにしへよりあけむ人のこゝろこの草と
きかへてゝ。日十いまゝへのこゝろとれひをもはひられしとゝ人も見ついまさゝ。日
七わうちとゝ
こゝろき毒衣 はるほうこ 幡幢之。方十六ゝら門のつられる小田をもむうら波
まゐ
ハゝ。日九茶大峡ゐハきとはわゝてさをてにハ
きこはゝこてゝ。和寶幢 波太保ゐゝ
かへてあうゝちふけふうもわかつら
せよ。きねうつらとハゝしとうへあ
やけき。日四きねうつら今きるいをを家ゑえて性の内ゑ志わとるかも。日九ね
かつら今きる妹ハきわしをいゝる妹うてゝ志る。分俗ゑゆゑねうのゝをひら

○比

び 幽玄。俗ゝ男ゐり女ゐりをゝいへるに用し。方十七ふさたて舟おさるとゝ後世乃
後ゐけふゐれいゐもちけしやいくゝ祈びう。日三むりこうたたぬちゝいゐれけ
めいまゝ都川ゝやこひうけ。日二こたゝゝ後をゐ家ゝ住ゐも
あひなゆきうゝしかゐるまて。式習 振國底國ゐ刺 葉後味後ゐ為ゐゝ

び きゝ ひとゝと連 。方五うめのえを

ちりまうひゝるをゝうひゝ竜巻も巻ゝまけて。日十 宮後ゝ枯風ふきぬゝしもあゝちく
に。日十三つりをはひゝたゝをゝ。日十七 ゝゝ後ゐハをゝゝちゝを。日十五ゝ後ひゝりう
らいうをゐゝ。ゝ

ひ 干せ。方二をほひのこはのあまのゝつ
ゝちゐもゐるゝんいさゆきてゝんむ

ひきをり 引折。方二いさたゝゝより後をうゝこみ彩乃かちひきをりてゝる。日十
かちひきをり。日九かちひきのゆり。日七かちひをひきう。方十ゆかち
ひきをうゝしいへるハ
いうきてゐをこゝをゝ

ひきの げ 引懸之。方十三花ゝちゝをゐうえにハ ひきし
ゝちゝりけちうつえにいゝるうかけ

よぢ 引攀之。方十三ひきよちてえゝもとをゝゝまうちたをり。日十九ひきよち
てをりもをゝら後ち。方十八引ゝ道。日二引むをひ。日十ひきめゝし。日十
ひきとゝめ。後後記
ひきゐつゝぬて

ひきのはに〳〵 引之後ゝ之。方六おちのこやこいをゐ
ひや後ゝくゝ。日十九まゐゐちをのひきのまに〳〵をゐ。日三むう
ゝこうなにゝゐちゝいゝれけゐ人ハミやて引ゝやゝひよけを

ひこづらひ 引連之。古 上分たち
うををいゝとゝ後てれをひをもいまゝとうぬハをゝゐのを後やゝとをたうゐちひゝそう
たゝをまいひこつらひわたゝをれハをゝ山ゝぬえハちきゝゝ。源後ゝひこゝちひとゐこ

ともはー
。文選 終撃

ひさにぬる 久不経宿。万十三月も日もかりりけくも久るふるも
ろの山乃とつこやゝとろ。日六 朝鳥のきこゝをかこを
こはひさにぬるゝ海
いうわこいにけり

ひさちらバ 久不在者。万十三わたらひの太のこの一乃
ひ— 待兼。万十三世京のひゝとなるまてなけきつるかも。日五ちゝくろひ
てこゝろふくハ皇ゝひこゝ
たとひゝゝとふこちゝゝて。日 絵角
こゝみなゝハひゝゝゝまきくたに

ひた 常々 頻。日 乗代 坂丘。日ひたつひ。万五
直土ゆわつときゝちてこゝ。日九 直さ
をくこゝるハわりきてこゝ。日大れほき こハときけるまきむたちくゝの

ひたし
とのゝたちゝるひとてうこゝて。常陸。俗のひこゝちたとゝへ日ちゝ
清ゝひちとりふちゝたゝの約ちゝ又ひつちも。万十三からちに鶏をちひゝゝ
うをやつひゝゝゝゝ。日二ちけきてまちらをのこの考ねころひゝかこのひちてぬ
きけれ。日十三きこゝふとひろおくちゝゝこちゝへの神をへひちてせもこへもちゝ。日十一
わきゝこうれをたくゝとゝへのてひつまてこちきゝ わるほ。日二ころひ
つち。日九あゝもひつちてゝ。古今 神ひちてむ浪ひ—
ふのこはまるをそゝつけのりかせやこくらむ

ひてびとも 雑不考。
。万さいろのゝこ

ふるのひさゝをひて次ゝもちゝさに太ゝよりてをゝむ。日十あ—ひきの
やまゝつゝるこひこ浪ゝもちゝさにちゝんゝよゝゝとちゝか祈。俗こゝちゝ

ひとゝゆ
一定 倦。万九ひこゝゆゝれひをこゝをゝをゝゝきに。日十三 ゆゝつちきこゝをゝゝ浪
ふ きハつゝのれひの三ちゝるほハくひくわこゝハちゝぬ。日四 ひとゝのこいちゝむをひ—たひ
をちゝうこゝへゝゝゝくく

ひぐく
。日 神武 ちつくゝ—くゝあのこゝらかきゝうゝに
ちてゝ—やまむ。万俗 うゝ—ほゝくゝくちひくくわれハわゝれ浪ゝう

ひまを
ひゝらくたゝゝゝちゝ 河辺。万十ふゝこゝえゝゆゝまゝ—ゝのをひ
。ふゝ—あゝゝとゝう乃河をい〳〵ををふゝ—こゝえゝゝいつひまゝとわゝゝふ浪ゝ海をゝ浪る
ゝき浪のゝゝをゝぬひゝゝをまゝりてゝ浪るをひまゝりゝゝ。日 久若 湖又間。古今
谷ゝちにゝゝゝこゝほりのひまゝゝに

ひまふ
拾ゝりゝロゝ日匂。万十五ちゝつゝのたきこ
うちいつふ浪やゝる乃ちつゝあ つちゝゝまひゝてひゝを。日いゝん
やゝちゝゝひゝちひゝゝり

ひろせいま—
唐くゝゝといまだゝ。日 雄略 はひつ
神ゝハいきてゝ。 りつまつきゝろ系のひろせいま—

ひ
鼻ひゝ。万十三まゝ日ねかきゝちゝひひゝゝゝきつゝんやいゝ—ゝゝもゝこゝちゝりゝひゝきゝこ。日十五
ゝをひ—ひ—ゝゝ十三ゝうゝひ。日十三ますけぬゝきゝちゝひゝゝゝきゝゝもゝゝつゝも

こむと云
こ云云

ひげかきなで　髮撫面〇方五ひげかきなでてあんをねさて人いあ〜〜〜〜ほうろへとさる。枕草子清少納言

のこてあるきはさらりひげある

とのいてれをなて〜。慢の体〜

ひざ　膝〇方面うちひさ法ゝやのつうせいやまとめ

ひざまくらたわをわをら法る。日五いう

ひざうふしものいをろとるくはて〜和琴はひさ不上をひくよ

ひだをで　手〇今俗ら

ゆ〜〜〜〜。方土をつ〜〜きゆをこむとうれよのうゝるかのまゆぬ

きうれ。日九古物ふうろうをうをうむたよのつろくのてさまをてちまを

ひとゝわうゝな

ひと　一人書方人〇日本武尊えゝ〜をひ〜りをゝ〜お人ひ〜ゝい〜もたもうひも

少次。日皇後軍ゲ之人相謂之曰人高千猶三歩。史記蘇秦一人當百

ひた

ひがみ　額髮〇方土こま人のひゝひ髮ゆゝる條ゆのてり〜〜ゝをわれわれあ

中。和額髮多比東齊謂之顙〜〜。武太神を髮條東条八條

ひとゝなることハかゝてきを　〇方九ひとゝちるこ〜ハかてきをそる。四十

二章注曰仏言人雜要及時為人雜〜〜

ひとちかいで〜　〇方二つ〜かを人とちかいて

あ〜けくもよけくもえむとちう　ひとだま　人魂〇方六人

たまのさちな

うきゝうたゝひゝりあ〜ひ〜

あまうハひさ〜〜ところなる

ひとつぬちすき　人史記岩〇方七こゝりくのたつ

ひ〜〜つ　セの山こてる月のゝちかけ〜てう

移ちなる

ひとなふり　賜〇方十五ゝ〜〜きの太夫ハいまもかも人

なうのこのゝたうむ。遊仙饒劇

ひとのたや

人之親〇方十ひのたやのをとめあこをあてこる山へうゝ教をう〜かのひ〜き

こうゝ不ハいかるゝ〜も旋乃おゝ〇月十八ひとゝのたやかとつるこゝとて人のゝふたや

乃久

ひとづま　人之妻〇方十二ひ〜つまにゝハいゝこと酬夜のこのひもゝ

たゝに

とゝハゝうこと。日十ゝちゝにを法ゝあひ〜人つまゆ

ゆゝにむのをのたをひゝゝれてめるゝうゝを

たるゝ旋乃おゝ〇方一人つまおゝうれこひぬ〜〜

ひとゝは　人間〇方人目〇人目な

るわ〜かきこ〜に立の妹ゝをおゝ〜うゝにてゝらゝをたほき。日人こゝの立ケ

き河をりゝ。方二人も

きまとゝしあハさゝうハ孤ゝうハるらやを面忘ゝもむ。古今くるてあくゝをれ

ぬゝのをゝ花ゝの人間

ひとなすみ　人傍〇方土ひとちゝこゝうけくゝはく

にうつゝひぬゝらむ

るをゝこゝを。日十六ゆゝちんとゝるゝハ

をゝむいちるゝも太の

ひとのこゆゝに　人之子故〇方土うをりゝのゝちる

なゝくゝなをゝ日

ゝりてやゝうこひをゝむ大舟の

ゆとうあるらむ人のよりるに。日十八
人のわやをつくるとて人のまハ狩の後に　ひとのなゝのごと　人之中言又横言
きゝとつたゆゆ。日九人のちゝことき　。方人のちゝこと
ちん人のゝこゝをゞなかもありぬ日ゝまゝ月の絶ぬむ　ひとにいひて
人に者言ゆく。方三ゝ　ひきの山よりいつる
月まゝとひゝヨハいらてきゝまちわきを　ひとりご　狩る。方ゝ
ゝをゝゝひゝかゝ　ひゝかを　横ゝ。古下ふ　ゝのひゝりしゝ出ひを
にゝるゝゝゝさ　ゝをりゝもたほきしゝゝきゝ
さハひゝりをかゝも。方三ゝゝゝゝ
横ゝあきハひゝりゝてゝゝゝ　ひとゝつま　一夜妻。ちゝ月ひつまを
かゝゝちゝりゝるゝくれきよ　今ハ花めをいり。方ゝ
わうひゝつまひゝに三ゝゆな　ひとゝめ　人日又一日。方八ゝをこうふき
ゝひゝの　かきゝのさゝらえ和いまゝるめ
ゝをこ　人ゝる。方ゝ人ゝるのいのちもわゝもゝ
ゝをこゝ　ひとゝなの人　ゝゝとこいゝのゝこゝ
ゝをこ　つらのゝまゝ　ゝをゝてやわれ
ゝをこ　ゝをこゝをゝ　ゝをこゝをゝ

ゝれハゝ人もこひけて　ひ　月し。方一日のゝゝの天ゝかゝに。日四乃ぬきのゝゝゝゝゝゝ
やゝうゝきゝゝみ　。日成務五年備山河而分国縣隨阡陌以定邑里国東
西為高綏西北為日横山湯日乳面山信日背面ゝ　ひゝの　光ゝ。方ゝまゝ
。唐ふハ西北を絶ゝ東西を偉ゝに。方ゝ　らかハ川のせひ
うゝあゝゝつるゝたゝゝゝ姉ゝもの　。日六山ゝたひゝり絶ゝん花さき
ゝをゝゝ。日七ゝなゝりのゝゝゝゝ月ゝのひゝりをゝゝゝきゝよゝふけにて
。日十七ああの三ゝゝゝれほゝてあゝ雪　ひ　氷ゝ。方一いゝゝゝかハのひゝりてゝむ
おひゝりをゝれゝたゝゝゝゝゝあるゝ　きゝるをゝゝゝ。日十三ゝゝゝゝ氷るゝゝ
ゝりゝゝ。日十伏ゝ月ゝこゝりゝりゝれるゝに　ひゝの〻　。祓ゝ月ゝ未申の方ゝ月ゝ
ゝひゝりゝ。ゝきゝてゝハゝれゝゝゝに　凡の名。方ゝあゝきゝひ
日ゝこゝゝゝゝ。日ゝ半ゝ　ひゝさ　暈ゝ。和暈氣徒日月也。方ゝあゝまゝ
音日方天日方の沖のゝ名ゝゝ考　ゝゝひゝさの閑ゝ。ゝゝゝのゝゝ
ひけに　日ゝゝゝ又ひゝけゝゝ。方ゝゝゝゝゝゝ

ひさめ 霖雨。方二。ひこの道くるる人のひちをあるくこひさめのふるいかるへの
ころもひつまてゝ。日 表 大雨。日 ずゑ 甚雨。日 表德 淫雨 ひつき
乃なかきごとく。方六 わあつちのちとほきうことくゝ日月
乃なうきうことくゝ。月日のきき ひならべて
連日。方八 あしひきの山さくらゑひなゝへてかゝさけらいこゝろうやも。うおな
らへてゝもいつゝ。日土 ゑ乃人へてゑをもきまやとちいやぬる神の社を祈るぬいはな
ひにさらし 日曝。方十六 あしいは徑てれる布を日さらし
。日 わまてる日乃けにほ。手活 晄 ひ祢と 次 終
。方九 ひ祢ゝにはよりけときゝよ。ゝゝゝ

むしのいちのうを毋のこるまてわりぬ男りをかれこひるけやと。日十三ひむしのうまやたてくるふこまゝ。織負令東市日ひむしのいちのうを西市日いろいろのうさ

ひらセ 平瀬 ゆ海のぬるきセの戸きをりあちる〳〵。方十九

ひかけるみ

ひらセにハさてさゝ〳〵ちあなり

や

日法在京。古下ゆひの日ひけるこやゝけのぬの祝之

こや。弐祝羽鈴日乃日向宮名日乃日張宮之三日終い

ひけとり 牽牛 ○古上ゆひ

ケゝりのわちひけいなハ

ひぐらし 蜩。方八張弓をれいふさみるくさむしいて

ゆゝしくハるいふもゝ

こちきけハをなくひくらし。日十ひくらし

いときとをけともわゝるゝをやめわれハ時不定哭。方三伊ゝとゝもへきゝと一

そありそおハしなひくらしとよもへ一蟬也落葉也又俗孝子ゝ名ゝ孝

。和芽蜩一名蠶 比久良之 ふ青蛙

ひげと 予雀。古下ゆ ひゝりいあめよかけるたゆくやえやき

比久良之

ちけさゝきとらさぬ。方十九ゝらゝくよてれる苦日ゆひ

ゝたあり恋かるしもひゝりしわりハ。日十あきなさあるひちりよちわてしう

ゝやとゝ約てもやかりこむ。日ひゝりあるゝ苦とさやゝなりぬれハミやゝとゝ

かゝゝたゝ川。和雲雀 似雀而大比佐利 源沢抄鶉鷸比佐利

。文選 鷸 向吉之ま迎之 仍鶉鷸 比佐利

ひゝつごふゝつご

一子二子之 唐ひゝつゝをうむをの名ハかくハゝり。方九 唐同

唐ゝうひゝつゝふゝつゝふゝつゝ。ゝふ 鈴ハゝゝ

ゝ白小奥名也 似鮎奥長三寸者。弐ゝも

。方十六ゝ氷奥ゝさゝれる毋名不着 ひ 柊 。方一衣名ハ田ゝ山乃ゝちゝ

ゝて丹生の柊山の木ハ名てゝ。日七なるかのたゝのゝきて

ゝきゝくの柊ゝの山をりゝつるかも。こ仍柊系乃ゝ。日十三 冬

芹 髭 。新芽食ゝ名ゝ衣を着し。日ゝけをかゝ法なりゝけのゝ

ゝてゝゝゝる系にて比髭を張ゝゝゝ。日神代 高山天香山之ゝ坂樹 ゝ髭 ゝ

芹 此之比舟 擬 ゝ 此之多須枳ゝ。和名 髭 ゝ 比加サ加豆良 又松茸一名

女芹 ま都乃古計一名 伏流手加世。方十九 ひ ゝきゝ山下ゝけかつゝけるゝへにや

ひかげかづら

さらに物之

ひさき。方六ぬゝゝまの恋のゝけけハひさきれゝる法きゝ系ゝちゝ

ゝ乃ゝゝ立し

ゝ名。日十ゝ手さきゝ久本今さくゝゝこゝにゝちにやたち

むゝる人ゝ。日十浪ゝゝりゝゝる ゝ法のゝをゆひさき久ゝくなりぬきゝる

ゝたしゝて。和 楸 比左木 太名せゝ。ゝ法ゝゝめゝハしゝゝ。 特の系ゝ似ゝ苗

及系 花 系 節 ゝ

ゝ名ゝゝ名ゝゝ

ひし 蓑ゝ。日 系 花 ゝおゝひゝくゝかゝまゝゝえのひしゝゝゝ

さしけくゝゝゝゝゝゝゝゝいやゝこにゝて。方七

男子ようきものの色のひーとると云うあーー袖めれよけるうめ。日六
世元のきくたたなる菱乃乃うれをつむとくや時古袖めれけむ ひとむら
木き 一野菊之。万八つるやとの一むてきをわりふ
ふをはりにたるもむるひとらまつありれひるつまち人るありせハきぬおせまーそ
たちをけまーを。日万六ひとらこういく代こめるふる凡乃こ毋の涙めるハとーふ
かきうも ひとのおうち 一松の内之ええとと面ミとーみをこえーみといつるはに
。万八世元の一うよのるるちる石るたのこてろこられるれほ
ろかよ
ちみ ひとをふるまく 一茅を葺く。古上やまものひとをとをきくきうな
かふしこ。日下やこのこをとをけハるかる次
たちうれなむあさら伊ちちうこ。万六一をこのなて
しこうをしうのころるれるこせむとれりひろめけん ひめゆず 姫石榴之
。万八夜の
世のをけうさけるひめゆりの乃ちまぬこひいらるー
きうのを。山丹元之メリ。和百合由利 一名摩菰之 ひえ 稗之。万二うつこに
アとしいとえ。られーれるうるひとを もひえいあまこれあ
ぬる。和稗比衣艸之似穀者之。万葉 ひる 蒜之。日夜仲いさあるこやよひる
つこみいるつーにふ。万六ひーほ

ほくひるつきかてく 朝もかもわれにるミせろ
ちきのあつとの。和蒜比伝 葷菜之 搗蒜齏 ひーほ 醬之。万二ひーほ伝よ
ひるつきかてく 朝もかもこ
ひきれび 衿之。和衿比木於比 小帯之。万十六
こえるたのこへのれひをひき世ある ひむしのころも 蛸蛸之衣之
ねのろろー
きをころもにようこていろ。日仁徳 ゑむーのひむーのころもをこへきて
かくこやたりかあよくもあら伝。毛詩蜉蝣之羽衣楚楚 ひも心
く 細紐。日天智 れこのるろやへのひもこくひくこよいまことろぬいここのひもこ
く。万九ひきもころゆてー紐をこうもやも伝いさやくくくにわくまてに。日
ナろ物ー枕ひきこうぬいもくつきちろこと在ろひもこうれねむさるの。日土用抵
かきこをひもこけまろくむうこうもむこれろ男。日十二こまけき物のむ
こひもこきさけ次いこひてまてこと三ろ
男ふこもこふこもあくむこのちれやゆころ。古今
。万五なれちつここふひもこぬこきこえこ
詔日男女並衣服者有褌無褌者及法冠級長級任意服之甚令集之日著褌衣
而著長級こ。立ーヒもいい ひまき 領巾之。古下ふ こーしきの大ふや人い
ろりあ次いろく姿をいよ かつちとりひもとりかけてまなん

しらたまゆきおへる雪まゝめ〻ぶ法ちまきりねて〻。日鈴明からゝにのきのくるた
ちて大ちこいひきふら波もやまゝへむきて。万十枕風の吹くまゝ玉敷玉ゝたた
ゝ〻るあの天ばひれも。日三たくひれのかくまくほいも名をしせの山つかけいろあむ
。日二玉ゝへの天領巾ゝりちぶ。日立ゝけつひくまつちとゝひめつまこひよひきふりしよ
ゝれひ〻山のゝ。日十三まちひゝるひまてゝるかな〻ゝ。日立松浦佐用嬪面遂脱領巾
麾之傍者莫不流涕因号此山曰領巾麾之嶺也〻。和領巾比礼婦人頂上飾也〻
。日崇神領巾頸。日天武十年三月詔曰赤膳夫采女等之手繦肩巾並莫服〻。遊仙
迎風帔子聳金者注云銘巾帔子也草曰領巾復曰帔子也春著領巾秋帔子皆婦人首之上巾也。岌〻ほ今ゝとて修こゝ
ゝたれ行舟もひきてゝる神を人ゝるうかゝしき。式太神宮將衣東衣結比礼八條〻
。花ゝまゝうねゝ八人馬ゝめをてゝ引ゝ出ゝ。北山抄立女
〻〻。北山抄立女

ひ

礼服無領巾〻

ひきつなゝ 引綱之意也 いこけ〻の

つまゝゝ舟のひきつなのたえむとつをを

ひ〻ゝと 引張〻。古下ゝ おくゝゝねの

わかるゝいちゝに。和牽絞ニテ挽船偶〻 かゝのこてゝちひくことにまい

をるをこゝろとこよにもかも。万五ゝゝこえぬ者ゝ思ゝ思ゝ

ゝたゝたれのこゝに〻〻。雅楽式 和琴長六尺三寸〻

ひ〻 引拉之意 修〻なゝ

ことゝゝ。万八衣手

ゝ〻〻ふくゝつくまてゝうゝ四をひゝ〻れゝ〻ゝ〻ゝ。新古

〻〻〻ふきうゝ〻〻四をひゝとゝへて又紐ゝ〻ひあきゝ有ゝけも

うつなゝ。後拾紀 ゝ光ゝゝゝひゝをうゝうゝ。和 比比比比波

木出於胡也馬上拔之一云魂式送也今之所用是也

○不

ふ郎〻。日神紀 たみのこのやゝの上ゝえのき上ゝとゝよみゝゝゝ

[illegible]

ふさ 總〻。日本紀 拾遺。万八い

[illegible]

ふし 伏〻。万土かきろひの山ろきふちのかく きにいふして死も泄えいそ〻。日四 [illegible]

ふつちのきし 二無〻。万十五ふ [illegible]

ふしならびに 二並〻。日竟祇 [illegible]

ふとまとごと 太諫辞〻。日祇代乃使天児屋命掌其祝詞之太諫辞 而宣之焉 太諫辞此云布斗麻知乎 式 大祓 天神祝乃

乃太祝詞乃手宣孔如此久乃良波〻。万十七 [illegible]

ふむ 含〻。ふくむ ほくむ つゆむ [illegible]

ふみならし 踏平〻。日崇神 官軍中衆而踊躍 [illegible] 因以平其山 [illegible] 山注清祖此云布美那良須。万 令 [illegible]

ふみからし 踏枯〻。万土乃の乃ものもの [illegible]

ふみたて 復立〻。万三 [illegible]

ふみわたし 渡渉〻。万三 [illegible]

ふりまへ 振〻。古下 [illegible]

れちふら
ふる 行雪〜。古中ふあ〜たまのと〜うきふれのあ〜とまの風のきへ
ふん〜〜〜 ゆく〜〜〜。方十九いもをこ沢こ〜のあへこ年ふれのつりんふのなくふ
日さなす〜。日大
風ふわい〜 ふりさけこる 振放見こふりこ仮さけてこふる。方二こ山
ふ〜ふりさけこう〜。伊賀あまのくらふてさ
けこふわかそうちる三
笠の山ふ山〜月うと ぬぐき 汎雑毛こ。日皇極山背王之歌髪汎雑毛似山羊こ
ぬ〜きにたし。源順家集 君きふかけふ〜〜きにくろかみの
われもたこふ ぬるりちらびね 二人並居こ。方三ふ野ちんふ〜りふら
ひねく〜どふ。日五にほ〜りのふ〜り
ち〜ひねこきふ。日考往やまふにそ〜ふこ
ねてたくひく〜こく〜ふ。時を〜れうみにけん ぬなこ 船子こ。方九こふな
こをあととひこて
こ〜
ちふ ふぬふこ ふハをちこちきこゆ。方七宗流川ハ水ゆなの〜し
ちき あ〜ろ人舟ふこ ふハそちこ
こゆ ぬりわけがこ 拐角髪こ振あてゆかこをふこ。十三ふ見えこうかりをこめ
拐角ふゆふをこう。方さをこめふふわけかこをゆ
ふの山ふちふ。かふ〜〜家ひあふりこむ。伊ふふこう
ぬかりけ髪もかふこぬ考ふれ〜てふれふふ〜き ぬりをるきみ

古考こ又ふるひ〜〜も。方十こうてにもわれふこハさわきぬかふこ考こてに
あふもむふハ。日ぬるひとにつきあるふやさ〜流のぬるきこをこれハかあき
。日ぬるひのいまを〜次なるを仮ふこけやふこ〜きこ考ぬき沢をまこむ。方
十物皆ハあたふ〜きこ〜唯人ハふりぬるのころふ〜かるこき。ふとおこ〜ひとをし
ふるひ〜〜も
ふちこん ぬるはひ 拳動こ。日あ康 元亡 威儀
。方三ふきまひふこきふし〜 ぬふきこてろ 太心こ
。方二ま
きこ〜ふふ〜きこんハ有〜かこ
このわこ〜ろをつあるもつも ぬくこのセハこ考ぬふこ ぬ 常之 不見如
こ。方十五けく〜〜つハかハふらぬこと〜くふくかセのふこ考ぬふこ〜くふ〜もなきふのの
人ふ〜て〜〜ふ。伊ハ風こふふ身をたふこむをふれひふをふあてふいり
なきふ ぬふ 二日こ。方八ふふ考ハかこ考ふこ考ふこ考ふ

吹瓢蕩〻。方十あきうセのふきちゝろ
ちゝふたゝりつあのあまつひまかも
ありぬわゝ八。月土ひゝさにふゝひり
うつせこのゝもふさゆくなる流ゝ妹
をいさゆゝとわゝくもあゝよりぬよあ
うセあゝこゝろゆゝくちもとちゝ
。日神代栗田豆田。荑生芽生芽生芽

ゑるいとときめやつこ。月四ゑゆき多てゆき
いとやいもうゐなりそれとれる蕚ぬ
め 図夏非乾〜。方一このむハとこよにちんふこれ〜るあやーきゑもあらとよと
ゆーつ蕚 ぬーれ〜るあや きか
ゆ。易河出図洛出書。史記神農有天下之宝也。式法初有神龜之
神之精也 ぬうみる 深海雲〜。方二かからのさきこなるいとりとうふえるれりるい
そう。日ふるえる乃ぬう先てこ〜へハ。和海雲狀ぬ雲形雲蕚美流武
宮内 詩記倭貢御贄内 ぬやき 。方一禁制 。日欽明制 ぬこれもる面〜。方三ちとう
志亡深海雲〜又長海雲 山のあてかれ乃
ふとれりよりかるるも
祢ちけひよのとも ぬぢ 蕚〜。方十 雲日出乃蕚ハちりるてちとこと
こかりのひとりてかとん。日三ぬちなも
乃花いとうるちりとりり
なーのあをれりほれや見 ふぢちなし 蕚ハちりきこれて笑ゆもこちるひ
ゆ蕚蕚是〜るるや。方十七蕚なこの井りいまてーーいとう。日十丸 雲姫よ蕚な
ミさきて流きとみ雲。日八ちちのるる蕚流いまさきるけか。日十ほとき
次きなきこよ〜次是へなるふちなこ人ゑ見ハこーしや。日丸ふちなるのミ乃
ゆとちきぬ見川の山ほ〜まれちなこ〜きちるぬ。ろのほう蕚流こよめるおいと

れほ
ーー ぬぢどの海 蕚蕚〜。方八大きの花を花こ次大ぬちてーこの花ちこ
な〜ーーまこふちろうま 蕚ろの花 旋頭歌。日初後紀幸
神泉苑琴弦芸揮蕚花于時白雲太茅領雲こなひとのうのかよめるふちえかま乃
乃れほるのこちりこけふ上和之曰ちりりとりりとりりと

たるをいへ山家のもの今さきわらうちといへるよを洲ってきるとそひう。方三てまのあるのしほやき衣のちれなんう方をしあわいまときなれば。蔓八蔓をふく。字書葛蔓生根可食為可作布これをハつるとそしてと

又土見こ草ちるこを

ぬぐし 堀事こ。方一ふくしとよこふくしもちいそう。和錄かふ布人之梨織こ

ふ源清 金衣こ。古こもしふしまにこやしたたふ次まさやくしたい。方四むしふ源まちこやちしたこいわくれこ君こしぬこちくしこさしも

ぬで 帝こ。方十六ふてのえや

ふな 月三能ふ源まり引こ河り。月九あさてこふ源まい

乃へ 船之舳こ。方十八ふちの〳〵のいちるきりしこいきお。月五舟の舳これるこちけて墨ちるんをたへくるこくこ

ふ稱のも 船尾なり

。方九行のえれ

ふ稱のり 船裝こ。方十とりるもへるも舟ふえしまかちちこぬきこしきお。月廿つのこるのちこ

ふちよろひ

えのつすりふ稱こうこいあれこきぬこ時こつきこ

。月つ乃くるのここ乃ちきけよ舟こうひこ

ふちぐる。和柚石赤都ふちたな

方船壹柄こ。方十七ちこのあまのつうちくふねい今こうハふちこよこうちてあこてこきてめ。日祇代臨船拙此之法那紙侯。文選傳文紙之紙而ちこ

ぬちは 船橋こ。方十四かこつけのさのふちたちとり

たちこれちさられこわいさこうあへ

ぬ稱ちき

かセ 船暫借こ。方十八ちこのここにふ稱ちまこるこ

たきにあてちこちこやとこえてたこたこむ

ふ稱ハえちけむ。方九

ちこのこるいつくちちちり祇こ

ゆくこもふこも舟ハえやけむ

ふちのきほよ 舟競こ。方一ふこ川ちたま舟きほひいちハ

ちりこきお。月廿舟きはこほかほの川のこちきこきぬこ

ちこいふ紙ちかも。和金谷園記云今之競渡ナリ楚元之風也

ふねちと

セ。方十ちかりりふねこセをここちをもの

いこらぬハかもかちの乃ちもちぬ

ふねぢかちる。方七船人の

ききちちちよほふのふるい

ぬこき 蹋ちこ 機の具こ。方十ちここの

かちへとふねこうかちちぬ

ふこきこちちちきて天のふ手

こ一ちれ男ちこむこめ。機

ふちた 綿伴こ。方十二馬ちこちふりと

れるときちてこちかくこちふ

しかくもいきお。雜令云畜

産給人者載舟車隙人者絆足畫人者

載舟車こ。和絆半也物使牛行不得自縱也

ふえぬき 帝ちこ。方十二

ふえぬきとち

をもひら先やとぎる。日徒伴ひらくとゆふんふきのかるあてこのや
けちのわるこゝろゆゑのほる。こて葬送の日のようひゝ古ハ伝る徒て是

○弊

へ京〳〵陣ゝ。方三門の外京より上候内の市ようつくまつりてゝ。日四あ
この山五百市かくせるさてのときさてゝ〳〵こゝ変ゝ〳〵ゆる。日六ゆちすき
にゝほへ浪ゝ〳〵。日七石陣山いゆきさくてゝ。日四やきゝちの屋つゝこと
ハようけくやわきゝ。日五〳〵ゝとわゝ〳〵妹い山川をちゝよへちかてやしケ
くもちゝ。日七山海のへちりてあれハゝもの。方ゝ。日仁徒ふゝとゝ〳〵いゝ浪へ
。弐凡中重庵者須念諸司毎晩掃除〳〵〳〵。日鶏子やまゝへゝ三ゝにハ
ゝゝのハわゝのハわゝこのめゝきちるつのさゝのくゝや。方四やまゝゝ
。日九常世へ。日十三ちゝへ。日十つゝ〳〵へ。日五ゝゝ。手かれゆゝ〳〵へ
ゝゝうやくゝこゝとけてゝゝけてゝゝほゝちゝかまゝ。のをち。方十四いゝのへゝゝ。をの
かきまつくゝ。日五いゝちゝん日の射ゝかもこをゝゝん人のひゝさのへわゝまゝゝか
む。日五この山のへ往ゝ。古中あゝゝきまの月ハ来へゆくゝゝ。方一ゝ。この浪わゝ
。日十九常のゝ へえのゝむけくゝさいくよまてにゝゝ乃へぬん。日十羊ゝや

ちんをくゝくハへ
ちゝこ

き

可ゝ。方九姉ゝくをゝを元て川よゝちゝゝをわゝかゝんゝきゝれ
さけるかも。日十毒百なる三笠の山ゝ月もゆあゝもさきゝ山よ
さけゝ梅の花もゝ山へゝく。日ゝゝゝくゝきゝゝのことを

へゞて

陣園へ。方八天
ゝゝられゝ人つまゆゝをにわれゝひめゝ。ゝ。なゝ浪ゝ。
もあきゝゝゝへちゝき。日十八

神代海淡

。方二わきゝれハあゝぬちゝゝちへをし
夢の川ゝゝよへゝゝゝゝ

へきハ

石浪ゝゝゝ。日仁ゝきゝ。日仁をゝかいゝゝゝゝゝ
。日三わきつゝしへちゝゝゝゝとゝもゝちゝゝゝゝゝゝ
乃ゝきゝゝりちゝゝゝゝゝめゝも。日六ゝ波浪

へ

かいの約きたれハゝゝ気ゝゝゝゝをゝき
へゝゝゝゝ。日仁約かつきゝゝゝゝゝゝわ
きへのゝゝゝ力。方四わきへ。日八わきへ
。日五つへのゝ乃ゝゝゝあゝゝへの上器

へて

。方十六へてれる
布を日ゝさゝ

へ

舳へ。方五船の舳ゝ
ゝてゝちゝけてゝゝ
。日十舳ゝもゝれにも。和船前沉謂之
小弟雅云船沉謂之舳尾謂之艇ゝ。
ゝ。へ金毛ゝ。日神武名其所置埴瓮為厳瓮ゝ。日乃サいゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ へゝゝゝゝゝゝゝゝ

○保

ほ 秀之。日本紀 ちとるとるやにはもこ四ちにのほもこ四ち

○日景行紀 やまとハ國のさらまたゝなつくあをりきやまこ

ほ 誇 ほこ

かきほ乃ことらひこ。万四かきほちに人こてきてわうをちこてゝさひありぬはころ

○日九かきほちに人のゝこゝをけきもありぬ日まぬく月のへぬむ。日土いをほをら

ゆきとけるゝきほらまをゝをも

ほう 和之。万土ありうこえほうゆくをこの

らひてゝてゝハのちにゝこひあり　ほうこ

ほうこ

○日きあゝうきのほうにも月ろうわゝうきのろるあけのあれゝ　かゝゝも

○日わうをこゝをひをゝをうあゝうきのろるあけのあれゝ　かゝゝも

ほき 祝之。寿之。日神代 神祝之此云武保伊相保伊相。日神武紀 をくちをこかみのとほ

きほきとほゝ　かひほをほきをる。万八ちゝひきの山のあれのほよ

とりてかさゝてくハちをほくとろ。日丸 楊弓法よさゝひもをきさけて

よ年ほきほをとよをゝ　あらゝにゝ。日ろうやゝにゝふゝやほく

とろ。日 顯宗紀 室寿。式 祝詞 詞寿。俗よ

ことふきゝゝ。新撰楽記千枝万葉 酒寿 **ほこる** 誇ゝ。万九あほのうら

ゝまのるうかつをろ銅

つりほこりゝをの。日七われりひほこりてゝ。日五われをれきて人りあゝし

とほこをゝとゝをの。古ゝも柳乃糸すりかるる春ゝもろゝゝられて花

乃ほこをひるける。源のゝをやゝちをきゝらゝ乃けゝきちゝらわちゝをゝ

やゝりていさりきるあまゝとほこちゝしけゝゝ。古今ちをひゝをゝをゝ

しき

ほさる 乾之。万十つくをねよ雪かもぬらるいなをゝもかゝゝきほにゝ

ゝ　にぬゝさるかも。日二春をて立るゝゝ三ゝをゝの夜ゝゝ

ほあめのかゝゝ山。日七あさりをるあまをゝをめら神ゝほりぬきゝ　夜ゝを

くかをゝ次。古今ちをゝめゝ夜ゝ月をゝわゝとゝてかりてたくあゝひの淵ゝえぬよ

ゝちゝき。拾遺 あゝ松尊 あゝひきの山下ゝよぬきよ

けほをゝ代きつゝけゝをゝもあゝちゝむ。ゝ和 紀 **ほし** 欲之。日仁徳紀 やまとを色

わゝゝうほゝゝくゝのハかつゝきゝとゝゝやゝきゝのあゝゝり。日 駿宗紀 やまゝゝゝをゝゝ

ゝのハわゝのゝはゝゝハゝをゝきをゝるつの山ゝのゝや。万三かけきゝくほゝきゝ。日土ゝをの

わゝくゝをほゝ

ゝりふわをゝ

ほとろ 。万八 法師乃ほとろゝに寒ゝゝけハゝをゝらのゝやゝゝゝわゝほ

ゝ　やるかも。日十 歌をゝをゝ敦戸をぬて出ゝれハ庭もほとろ

ゝゝをゝ　ゝかゝゝ。ゝほゝゝゝゝと又すゝゝれも。日十さゝゝ系にをゝれふれほ

ふほハかもわまれんときゝハまゝてわゝほ。日八わゝをゝをけふゝくゝと出ゝれハ

[illegible]ほどろ[illegible]ほのぼのとあけゆく。文選 牛散

流日 連日 延日。日 駿河記 牛馬 [illegible]野〳〵

ほどろ

ちの御流ほど〳〵。方四 よろづほどろ出て[illegible]あらくあまそひ

[illegible]ハ杖の日は 桂日をかりゆくらやらに夜のほどろ

[illegible]ほどろ。方九 前 ほとゝ

[illegible]。日十 前 ほく〳〵

[illegible]。方七 [illegible]ぬさとりハ[illegible]たきこゝろ

[illegible]ハ[illegible]。日ハ[illegible]ほとゝ[illegible]。日三 ほく〳〵[illegible]

[illegible]ハ[illegible]。日十 [illegible]

[illegible]。玉住日記 [illegible]

[illegible]。六帖 [illegible]

[illegible]。拾遺集 [illegible]

[illegible]。日三 [illegible]

[illegible]。日 [illegible]

[illegible]。日 [illegible]

[illegible]。日三 [illegible]

[illegible]。日 [illegible]

[illegible]。日 [illegible]

[illegible]。日

ほくふし　法ぶし。万十六　法ぶしなるうひけのうひとらひ馬つるきいろく
なるのきう　倭あうかよ。和玄蕃　保宇之万良北止乃豆加佐

やし　星林し。万七　あめのはよりもの流とち月
乃舟はのえやしまきらへつるも

ほ　火し。古中ると　さ初さしきさむ
乃をぬまもやる火のほるよ

たちてとひし　知らも
。月祇代　火し出える

ほうかい　細川し。万九　ほうかいの
流る流乃とわける

ほつこう　最廣すし　最上
廣をくし。万七

ちちこふこうのほつてこうまち
こえのたまゆきこうこしい

ほ　叫吼し。万三　あこえこる虎うほやるとえるまてにこ
。月十三　こーきにわつまつきこを太わ流えこうこ

ほ　梅し。万十　枕えきの花型のえこきき梅ういて次わこひるこ
るのわこ田の梅るいて次わの中流こふるこのおろ。月十二　乃やこの梅英方から

てしかこし　見こちこまてる見をしーまこむ。月十三　にいて
いこーやしーこ　新白つの梅こうこさきいて流てひをこてる加也

ほくみ。万八　わこうけるわ
こ田のほこち遠

たるかてこうこうこ　云ぬきセわりセ。万十七　流をぬき見こ
とるこ　求りをこうわの田野よ枯りてこ梅を拾てほこしをつる

ほこ流き　杵搗し。万三　いつ
しかも祇こひけるこ　青山のほこ枯こまるこけ

を次きてに。弟る似こ枯をしふた　ほつえ　最枝し。つい助こよこて　新つの
葡萄こ。古下こ　ほつ

えいあらをれへとこ。月信花　ほつえ　厚朴。万
。万九　最末枝。月十　末枝。秀とひ梅と　ほ　かえ　古枯こ
こさけてこる　ほかいあこかも似こちきぬこ。月　流見きのこをきこよ
いしきこり酒のもとこ流こてのほかかい。和厚朴　保こ加之波乃本　古いこ
このをてこ　旅行　あいこひのてにこる。膳夫　きこてこ　古古の色こ
かてえこ　武よくハ。弓冊　新枯こる　介月　新山のなこのこ加
しもこ　。月祇武記　葉盤八枚。和本朝式　土月辰日宮の令　葉飯器
参議　朱漆五位以上　椀久保　漆椀　杉　葉手。類聚三代格　大被　秒物　坏　古口
盤天　柏十五把　牧手六　十牧　瓢柄　。北史　和名抄云　俗無盤　俎　藉　俗　葉。かこ大とい
へるい　唐　の　枕　枕　て　ほ　ほ　て
かひこ　。苗　を　。手　萄　。和　寄生一名
ほこ　て　て　て　ほ　帆し。万七　海人小舟　寓生　保夜。万八　見日本の山のこぬれの
ふちこ　ほこ　ほこ　わ　ほ　ほ　ほ

むち 鞭〳〵。日本紀既産之宍生膚上其形如鞭是月皇太后尼ゐ雄装之負鞭故号其名謂峯岡天皇一説上古付俗号山鞭沼襲武多弓〳〵

○末

ま 陸奥国〳〵。方土ちーひなの山〳〵をわけほそくきんゐの涼ちくきちんゐ月ちちーけやきちきー。日三山乃まゆいらものゐらもきりちわやうーの〳〵山の麓にゐつろ〳〵。日ちーけやきちきー里をきれよやゐつをこむ尼も孤あ〳〵に。月十四ほ〳〵ほくのやかゐ〳〵ひるいとりへるいつろ〳〵むあゆもあう路。月十七俗まゐのハこめれ花さきこ〳〵ちゐ。月十三いらのまゐゐもこ

ま 助詞〳〵。方土かへらまゐ〳〵ゐるうれこ〳〵くひれめちーほ涼乃ゐる時もなー。月八好うたあわてをもまゐ主ゐのゆをゐぬけるつを助ろ先ーてこえませ。こうちゐゐるとこ月ー。古今ちこれてきすーんのこうー

あわハ加へるさまゐ尼ちーしうきゐ次

ま きゐこほるてうゐるとこん文たくろふるとん

みきこ〳〵ゐこもをさっ桜ちゐ主ゐ遊死ち名をあ狂れたほー

ぬちゐ月さちゐ桜ちゐ桜をるさちゐ書名ちゐ

。方サ〳〵ゐこへとまこひゐちりぬ〳〵。月ちっかゐ〳〵きこ〳〵

ゐてき 見行ち。古上こ八ゐ京の神ちここ〳〵ハやーまくに月あまきうゐて〳〵。日能仲紀やー

まくにつまくおうるひのかゐちをきこ〳〵。方サセちうききても月乃ちちかくこ

まかる 退〳〵とりて〳〵まりっつるをこ〳〵。方三怪良名ハいまいまちうもゐまちくら

むろのかのこもれをまこむ。月五ちうきこーけくーまちーハこうこん

乃ろてをこふこさねこつくこのこもむ。月六をこ乃

ゐ門るゐれこちうかくこのりちなハ〳〵ちゐ

さむをあやゐるこひきこー〳〵。月中かひゐるをまもむこあわはんこさやんこは

あわハれゐこと〳〵。日繪仲紀いさうてをうれ

きつうたくきあきりり。方三ちるーちうきこ月ちをこそるうゆをこれハ人のゐまき

て海ちゐむゐゆゐ孤。月三てりり國のこちセをこゐうゐにまける むハこうれてあ

ゐこうこんむやも。月十七をこゐうこをこゐ涼しかこうこまをたこるまうこ

ハこまゐ。月七れきつちこ〳〵つれきゐちちこ〳〵。月二あーーかもハきこわちと

ミるこ

まゐこて 枉言〳〵。方三わうきくこつるまうここちうちきくこつるもこ〳〵。月七

てくこ

まうこうこうれうこ〳〵。月立あちきちくゐのまうこと

ハ〳〵。式内門部祝詞 四方四角より陸奥国荒御神 東方神〳〵

。日景紀 柏済神皆震人以放毒気人令共防人為禍害之義〳〵

まゐひ 動〳〵。方主ちーひきの山〳〵ひうりちちんのちりのまこひハけちこ

ありける。月立うめの花ちりまうひゐるちこひゐ色ちこも春つこ

まけて。月八枝さきのちりのまろのようにうてゐるなり。爲のこゑのこゑのをるけさ。月九枕
乃ふの八十のいもらうくこまろふ井の上乃かとうこの花。古今この屋にとひねしあへ
しさと〜花ちかのまろし

まけ 佳し。方十七大きうのまけ乃まろ〜〜こしきふ。月十八大
ふいへちわ沼まて きみのまけのまろ〜〜こ。月二とりまんといへる
ちかきう。位を

まく まくの約むし。古上ひけうの乃ひけいをいなり〜〜とい
ちはりふもやまくのひとくとも沼きうおうふし
ろうちろうさまくあさあめのきかまろうん〜こ。方二このをうふ大宮ふまろう天王
乃ふかう〜〜さとふぬらまくはのち。月四こひまくはい〜。月十こひぎ〜〜〜い
。月八ちろまくを〜日

まく〜 ゆう〜〜ろるは〜。方十八大きうみの
ろかいとれ沼〜 まけのまく〜〜。月十三天宮のゆきの
まく〜

まけて 設而し。方十九高まけてうのかめ〜きよさうあけてをふりるく
まく 〜きた白ふうをむ。方二かとまけて〜。月四や〜あけまけて
〜。月五高〜まけて。月七変まけてかく〜め歳ゆ〜れ沼ふとて。月八あまけて
。月十付ふとまけて。月十一まけころかこと。七俗ふまろけ又儲のろちゃ〜ふ
ふと

まける 負ふし。方十二ちきゆし爲のこと〜ふれ沼〜〜くこのこら
月し やかまけてゆ〜む。月九ふとろをれまけてはあら〜とこ

まことと 信へ。方七よのちろはまことふとろはゆうしはきうゆ沼ふあん
ぬれろへは。月四いつをりも似つきてうをるうつ〜くちまことわきをるわ
きふとひゆゆも。月七まことまちをこうのりふをふ。日垂仁紀やちろひけ
ちうえむやこひしきふのを

まごと むはまてわろるのとく常ふまことふん沼〜。月
〜 **まごと** 月ふ〜足ることをりふ古沼〜。方二あちさをふまこともふふん沼〜。月
四まこをふろもうたとりしき。月五まこ〜〜こと加らめ〜〜
まさる 益〜。方六ふちふ〜ゆ雪消きていうつ川〜〜。月九りふ〜まとる。月十
さうえ乃さやく霧ふりはちく〜へるところにまさるころちちとはと
まさら 。方八さいり花やりもあうむとれ乃へろいま乃まさうもうるうふ〜ふも
ま。月十二まさらも男ふふり〜〜ふをふ。今俗まさうの時とふるふ沼し直
者のて
とふ **まろけむ** 將今辛之。日景行紀いのちの乃まさけむ人はた〜ふこもへろう
乃山の白のうえをう沼ろのさゆこの。方四ろいのちまう
けむきはふつちれめやいやひるけふい男ひまはとも又まさきくくと。方二雄代のえま
れうえを引むをひまさきくあ〜はまとかろうむ。月三ろいのちまさきくあ〜はまち
足むちろのたぼふふるちろ沼

まし むの乃ちろ。古下ひきとのろくる沼ちら
月十三ことときくまさきくまやと。 ろくへふいねてまし乃とのれいふけるかも。方

五月ろろ〜ハ父とりこまし〜家あ〜ハ母とり又まし〜こまる。月家ろろりてたろ〜りこ
いなくさむるこころもあらまし〜ちちハちぬとも。古今世の中ことえてさらしの衣り
せハ衣のそろハの　まし　唐こ。万二ふ〜〜きまし〜てこ。月九　命を〜まセひさし
とけからま　かれ名ほり山乃ふこちらし〜まろ〜も本む。月ひとく
に〜君をいまセていつまてろ〜ろこひををむときの衣ろ〜ろく。月大君のこと　まじる
かこみさし〜ちろ〜し思ていてま浦やろをの君ハ。こかれ行
交こ。万十四ろりろきれをハなやきろふるくさるにの衣まし〜ておひハ行ろる加。月二
けふ〜〜こつうまつきをハい〜かんのかひゐまし〜て有とい衣浦も。月九　ひとつまわ
きとまし〜ろむやろまこ人をこ〜こ〜こ。月五　まだら　浦衣こ。万七　今ろるまさら
風まし〜て面のゐるよれ雨まし〜て雪乃ふるよハこ　衣ハ矢こつくこわれこたた
ほ物いまこ〜きれこ。月十こきるぬまころもろきうきころもちかこらこきに
あ〜ぬとも。月十四きこ〜ひこのまこらふ浦まにわこさちこいうなまし〜よのいもちをこ
こ　まじる　未こ。万九　唐ほこき浦わうやこのこうるる橋花ろちはをまこ
しこきろちろくこし。月十五伝紀　豫。月　欽明紀　忌。古今　浦衣　未
万ハいけるここれハまこ浦衣こ。ここえてかくわりろくぬるぬろハ。古今五月
こハのもうりちむほこきほきこ衣をきうえや。浦衣　意浦衣ろ

ほろろまきこきろろけてこ人ちれ浦　まろ浦　奉こ。万十ろこさこまこ衣乃こなにを
ころ花をひろ〜し〜ろ　かもいそれいろ〜こわろぬ浦まえむ。月四
ろろもかここまこ浦ここ。月九　まこ浦らむ　初形こ。万五いてゆきこ日を
こいこるにかきさへまだ浦。月十君まま浦　かろへつけふ〜しあをまこ
浦ろむちく
ちこらハも　まちよろこべる　待收こきりく〜浦のまちちこへる花の衣を　ま
ぬるちろ〜ちこ〜まころ〜われハ万十　じ
先こ。万五　春されハまちなく〜ちの谷のてときたちし君をしまこむ。月十
枝をた浦　まつろふ　帰須こ。日　雄略　たくふらるあむうきつきつろのわむをあきつ
ものてふ〜こ　えやこひけふむ〜もれはきみるまろろふちろかこれろむあ
きつ〜まやまこ。月二　まろりぬ浦をれとむとく
月六まろへ乃もけ乃まにく　まつる　奉こ。月　神武紀　まろこ
さ。万七ふるゆきのちろこまてに大こつへまれハ半ろくもあるろ。月二かころ
まろりてこ。月十ぬさまろりこ。月十八まろるろ伝こ。月十三いろ〜てろわこ
をまつる神めの〜浦のむ　まつかへこちひにてあれや　紀変詔而
うけこまハ〜り〜こ　在歌なり

○ねをもかたりつゝ八誣てしたゝ〳〵いへるこゝろなり○万九まつかゝ子ひこと
あれやらくのちゝうえこゝ法てまつゝりゆやも○月十七まつめ子ひてゐまやも
さやまゝのをちゝうのひゝうるゐりけむ

まつは 徳〻○万十五歌なし乃男ひまつ〻〻〻

まつる 祭〻○万十五いゝ〻〻

ゐゝをまつる称めゝのゝ法のむゝけゝれゝりゝこと○月七ゆゝけてまつるこゝろ
乃称をひてゝ〻○夫なゝてゝまつりけつをそれゝやゝんせさやゝ乃さきをゝりけてゆゝハ
しゝう

まて たゝまゝ○万十端手

○月十三たゝちゝ

ゐゝ

まちうり 典〻句〻○古上あわゆきのゝかゝるもゆをゝゝきたゝきまゆかり
典接身体而後為之〻○万二為乃こゝやまゝりゝいけのそゝちゝりゝ人ゝを

まなく

こひてゝ池ゝかつゝ法ゝいへるまゝゝの池を古ゝまゝゝ乃いけゝゝゝゝ
間無〻○万四あつゝゝ竹面のゝゝゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
けゝゝゝゝゝ乃かゝゝゝゝ形くゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ものをひまりにうちぬらされぬ涙ぐましてゝ。月たゝのまりこをとゝのすーあ
るにおくこゝろのつきぬものむ又風寒。月大殺まりゆゝのまり。月サあさも
るゝ。月土せきりゝ。月面さきりゝ

まゝね　ゝゝし。月に徒紙ちゝい〳〵せこゝうちゝにゝ
ちゝえゝなにきりてまゝゝられ。廿六雪の
。源少をきりてゝ　れたゝ
うゝゝゝゝまゝたゝちりいゝまゝにあれゝまゝねこむ年のをゝく。月十九ふるゆきをゝし
にゝちゝてまゝゝりゝ　ゝゝゝもゝくゝゝる年のゝゝゝゝに。月サまゝてゝまゝゝを。月
ゝゝまゝゝ

まゝゝひ　紙し。和紙廿ゝ布　又ゝ紙繪歌壞ゝ。廿七ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝてゝゝ　ゝゝゝりのちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

収一。日土ことゝまの八十のちまとに出けよ　まなほ　吉兆。方七まりをこ
うらまとにのれいとにありもよ　あつかちくらちけかむ
まかり　匂し。方九ほうきまゆねをあまりゝ　ま　目こ。日神代紀八十万神皆不得目鉤お洞ゝ
。源氏物語　ゑこまけてこいくつらふをいよ
。方十四かこつけのまくりしまとよ鉤出ゝ一まきらりもよ　まなかひ　目之間へ
ありてこれハ。日端ゐとりへるてゑるへ一　ひよこ和て
ちきこりしこのうまなひ。日ゐあるよりてそろりとゐく男子といへこ　まなのふし　職こ。方十六
つりしこ小田をたむうこ次まなのふとたれて　ます　使へ。方十四まもあれも
まとほこにをりこまなのとハ目之蓋家ら　こ。日神武紀あるうち
とりまこゝ和とちけ
るこふ。汝ゝ　ま次らを　西蓋男へ。方十六まれらをとれりへるれ
やこつくきのこらきのこへよちこゝとのこゝむ
。日三ますらをのうこ次をふりれこ　ま　目之。方十
まれらをのうこそろもわれいちこ一するひるいをれ出てわれハ。日いそほそら
行とけるへきまれらをもこひてふ
こいのちよくいちり。こゝかをし　まつのひ　間使こ。方九あうりほれ人まあ
うやと家人の蓋多ちらをまつ

かひよまる。日六まてこもやらにてワれハけをこるこ一。日十うめの紀
うをこゝこゝふこゝ宮のつちろろけもふ宮てこ中らハ。日も間使こ　まなのこし
さこ之子こ。方六ちきこよてれハまをころこゝこよれハまをころこゝこ。日ほこ
なこハ母のまをころあさもよ一本の川てこの水くさ方山。日十四まをよりこ子こうあや
こかあこ。式部日国紀八十書紀八十字手生絵は
八百万神字手生絵は　ま　つきこ　卿こ。日三条紀
ゐけのさをは一こつきこいけこ次もこけのさをこ一。方一　まこ　目之。方七
まこ一をのこ和ともこのふ大まこつ男とてもこ一も　大舟をこん
ちよこきのてやふこゝけちこ一るこ一ま四乃こと　加眉こ。方六ま
。源氏こつふ　まこしたくもいこたいけこゝ　おのこしをお
こもるあハ乃山こ。日伊豆紀有宮玉神ちめ美女
之眼こ。史記　阜文君眉色不加黛如望遠山こ　まゆねかき　眉根掻こ。方六月之
ねこきけるこくこひ一ちこあこるかも。日土まゆねこきえこひ往こけまこ名もこつもこ
むとこひこ一ちまを。日ゆいこまれきく人乃まゆねをこつこかこあこあ絵も
。いこ一へこりかここちきこありこ一ちこへ
。遊仙略日眼皮睫今紀良人見こ　まろ　自称之名こ。日宮神紀かこ一
乃ふにこくこをこちりこくこ

まかりる大きうまらにきこしをもちをせまろうち。和泉式部日記去月廿七餘
智和言葉文也と。方十六むえきかりとかまろむろうはとちろめりとをかきそらむと
め。日九まろかつりこひよてあれやもとつりりりをえこ次てまろとりふやも。源氏物語
てかるふることりなりにまろうやうにしちほふちろれをのく和泉ありや。伊勢
いつりりくよかけしまろらけるこけらしな

まこまてり　おむよ。方七　まこまてのむよ
いもえりるまに。日まろまろぬよいくえへぬ人と

さしまきと。方九いとかりてまこはてのむよさし

まきめ　四月。方三さう
かこまきめにえ
かへしよ。日八まむよけとまてきしかへし

をちひと

まひにいあて次　次。日ふちる次し若中こりりをちりかつふを
ていこうと
かつくまひよいあて次と。方十四まひくれてこと

まちなごぢ。和泉式部方ふた鐵細川。方七紫りえるはくらりまちなこちく神りこ
まてぬ次ちちりちむ。日紫えりきくりの涙色のまちなこちりまな
ほたしー有ハなうちけりむ。日十一ほこてハこちりこ

まづかき　前掛。方四う
こふまちなこにもと。日十三まちまちこちりんにふこ
てこへまちまき
をかここまくほりりむといへや元をこにとろう。日十五山りまちほきらふ
こへしころまちきのりはるハけれけま。日四りきこころやとりまちきをこと紙ハ

けここ門ようりか　まきこちーら　きらふ和泉式部方ふきまあをりふ和泉式。方二まふそこら
へしてむりも　おときころハちりーかと此者ふこつめりふ　ごも
。日六長柄りこふこまきこちこらふこころこきてこと。日十まきけーらほあてこりれるとの
りこといまもここここ　わかりりこれ。日七まきこーらつくるろま人いさくあこと

まきのいこぶく　ちはえ和泉式部。方十和くり山りまきのりこ人をれしひらきしまや
出ちぬ法ハいこりこむ。日九くり山りまきのりこ戸りこるこやみ
はりあこりの雲りこへよ雨ぬ
柄戸　板戸　柴之戸　日しこ

まけい法　出産。方五ふこほのまきいほりこ
ちょこちこちよりらときーきてこ

まや　柜樓。方十二まちこーよ雲こむこまのこ。馬塞のこと

まなこら
。日十四ここーよむきこむ左こ
潮鈴。古下まちこーらをほきあへ産
まくめこほくまりりおこ。和泉式部

まゆこりり　。方十とちこ和乃母乃
ふふりまゆこりり
ここれる法をこるよーもかも。日十三とちこ和の母りこりりまゆこりりいふせこも
あこりいもにあこれーて。六帖ことしーせりにひくハ眉りこ産衣千世をかねてう
いこひろめけむ。雜をこふとく

まかこ　狼こ。方十七大口乃
焼まこ法宮よやーこりむこつこをひ

まきり
まかこりこりこ

ま　まあを　まふし。方十　まきのえも
あらうひかひてを身より
ぬーくもあるを。方七　枝さらくかけにも
つゝけむ。日八ひやくらまきーをそ
うんむ。日九うを一四も
まきしらとけもらん

まく　蒔し。古下うとやまかとにまけるあを
なもまこいをくやさにーつをふた
せむしやうまきーからあゐ乃花をれう
ーこいつーうも花ゐさうをむをうゝ
馬乃し。方七　ものうきまさむをまくさゐをむ
。神楽ゐをひもさむーゐまくさもよー

まくさ

まごえ　孫枝し。物よりまらつるふ枝をいふ
。方八　まをれいまをえもいて

まこゐる　假面書し。方十三
いせのうをいけあを
なきにきよるゐるゆゐをきにきよるまをゐる
。和鹿茸狀似水松　至乃万太ゝ。式ゐも出くり

まつのへ　松柏し。方九　まらかへいまかへ乃さかえいま
さね米ふとき
ゆうきを　まを

まつ乃を　松之花し。方十　まつ乃ら花を花の仮ふーも
ゆうやこうれゐんらちくれをゐをきて
ゆうやこうれゐをはまあ乃

まめ　豆し。方十　ちの乃うまらゐれゐをはまあ乃
からまるきををむうをゆうやうむ。和蒲豆　アヤマメ

まゆみ　。方十三　さらは作し
乃乃とかゐうきかをゐま
ゆふをてあをくゆゐれ

まゆゐ　檀し。日に徳化　ちをやゐゝうちのゆうゐうち
たりをゐたてるちつきゆをいをうゐとんぶ

をゝゝゝ。方二をくをかるををををををゐまゆをわれひゐうまむとをひていをゝいをむも
。日十　天乃ふ乃をけゐれハををまゆををゐをゐゐ乃ゐをけむ。日七をを
ふちの仙川山をとつまををゐをつまをゝまて人をゐををを。日七をちゐくゐあゝ
らまゐをゐつをまけをゐ引をゐ人乃ゐ乃れをゐをちをむ。伊あつをゐまゐをつを
ゐゐをゝをゝてゐつをゝをゐをゐをゐ　まををこも　さふ蕎し。方十四　まををこを
ををゝはれきつをかもの　もゐふのをちかくてあゐ
をけきゐうあゐ。

まつぎき　さら猪し。古下　をふゐゐ　まをこも　さら蕎し
ゆつまつををきゝ　。方十五　まをこ
もかゐ大やはゐ
ゐをゐかかに

まちさけ　待酒し。古下　醸御酒　酒　酎　。方四　乃ゐをかゐ
をーをーて。日十六　ををををけ
をゐゐかをゐをゐをゐまちゝゝ

まかよか　祢　さ金をあゝかををゐ。方十四　まををふ
まをふくきひ
ゐをゐゐやをゝ

まうか　さ鉾し。方七　まをゐるもちゐ削のかゐゝゐ
。和斷　賀茶。茶乃　鉋かふ。をかむをゐ

まくら

かむ　枕將經　まをむの乃黒し。方十一　ちをんゐ乃をきにかもをゐをゐ人の
ひさのへゐうまくらかむ。日九　持ゐををゐをきまくらかむをし。日三　まく

らか

むし

まくらたち 枕太刀 いめるは枕のほとりにくくりつけたる太刀なり。方サまくらたちうえとりたきゝ。日九かけたきの

をとち

まくらうこきて 枕動 こ。方土ーきとへのまくらうこきて

ゆるもねにゝ。この家乃ひゝとちるを

てちけきつるかも

といへるなり

まくらかこ 枕代 白銅後。遊仙書銅後。方土六

つゝ日らくすゆこのかをゝ。日土毋ゝ死えとゝつゝとるまゝこかゝにあきつひ

きゝゝ。日土まゝかゝえるにとりとちてあさなさちられとゝ乃えとあくこと

ちちゝ。出雲國造神賀詞云

麻紐ゝ乃大御後乃ゝ

まつらふぬさ

まつらぶ 松浦舟 こ。方七まつらふぬかちの

とゝうしををやみも。日土

ひのゝををやむゝ

まひ 幣 毋ゝ上二人以榮河伯日幣ゝ。日垂仁紀今神宮

ト兆器ゝ神幣。方五ゝけきゝ乃をゆきゝ乃ゝ

ら七。日六あめまゝ月よゝをゝこまひゝゝむとへのつひれひてゝは

。古今旋頭 花まひすゝ

たゝ乃つへき花乃名乃

まや 遠矢也。日神代紀つくゆゝにまりやを

とくへうまひとふうまひとしぬちやゝし